科目名	倫理学	担当教員	清水　俊

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	大学や専門学校で倫理学・哲学を担当し、またフィールドワーク調査してきた経験を活かし、専門家に必要な倫理や論理的思考を教えることができる。
授　業　概　要	基礎から倫理について学び、倫理の必要性や考え方、現代の問題への応用について学習する。
到　達　目　標	倫理的な考察力を身に着ける。新しい課題に直面した時、自ら考えられる論理的判断力を身に着ける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	嘘をつくこと(教科書第１節)	カントの考えなどから、「常にすべきこと」という義務について学ぶ。
2	功利主義(２節)	功利主義的な考え方と、その問題点について学ぶ。
3	薬の配分方法(３節)	「誰かしか助けられない」ような問題について、自ら考えて答えを出してみる。
4	エゴイズム　(４節)	エゴイズムがどこまで許されるのか、エゴイズムとは何かについて考える。
5	幸福の計算　(５節)	功利主義の習性案について学ぶ。
6	判断能力と価値判断　(６節)	判断能力とは何か、それをだれが判断できるのかについて考える。
7	価値判断と事実判断(７節)	価値がどのように導き出せるかについて学ぶ。
8	正義の原理　(８節)	正義の原理が定められるかどうかについて学ぶ。
9	思いやりからの道徳　(９節)	思いやりだけで道徳が成立するか考える。
10	囚人のジレンマ　(10節)	正直者が損をしないためにはどのようにしたらいいか、それが可能かを考える。
11	愚行権　(11節)	愚かな行為をする権利はどこまであるか、愚かな行為に対してどこまで介入していいのかについて考える。
12	貧しい人への義務　(12節)	貧しい人、困っている人に対して助けるべきか、誰が助けるべきかについて考える。
13	未来の人への義務(13節)	未来の人々に対する義務のあり方について学ぶ。
14	正義の変化　(14節)	時代や文化による正義の違いについて考える。
15	科学の限界　(15節)	科学の発展に限界を設けるべきかどうかについて考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　(80 %) ☐ 実技試験　(　　%) ☐ 小テスト　(　　%) ☑ レポート　(20 %) ☐ 課題　(　　%) ☐ 発表　(　　%) ☐ その他　(　　)
教　科　書	現代倫理学入門（講談社学術文庫）
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	手話	担当教員	福田　九

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	人文科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	地域の手話奉仕員養成、大学での手話言語研究で得た成果をもとに、言語聴覚士として手話を必要としている方とコミュニケーション関係の構築、支援について講義・演習ができる。
授　業　概　要	ろう者の暮らし、手話の歴史、聴覚障害、ソーシャルワーク哲学を身につけることによって、ろう者・聴覚障がい者に対する支援技術を身につけ、コミュニケーション力を高める。
到　達　目　標	・手話、手話言語に対する違いを説明できるようにする。 ・手話で話せるようにする。（日常会話ができるようになる）

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	本講義概要及び学習の仕方指導	本講義概要説明、文献の使い方等を学ぶ。
2	手話と手話言語について（手話言語概論）	手話と手話言語の違いについて、ろうあ運動、日本手話ＶＳ日本語対応手話論争等の歴史を学ぶ。
3	指文字を覚える	大曾根式手話記号を覚える。読み取れるようになる。
4	地名を覚える	熊本県内の地名を中心に覚える。
5	疑問詞表現を覚える	疑問詞表現を覚え、質問できるようになる。
6	語彙を増やす（食べもの）	日常の暮らしのなかの食べものを中心に手話単語を覚える。
7	語彙を増やす（地名・国名）	海外、国内の地名、観光地を中心に手話単語を覚える。
8	語彙を増やす（スポーツ・趣味）	スポーツ競技や趣味の手話単語を覚える。
9	語彙を増やす（学校生活）	学校生活に関する用語の手話単語を覚える。
10	語彙を増やす（家族）	家族関係に関する用語の手話単語を覚える。自分の家族構成を手話で表現できるようになる。
11	語彙を増やす（働く・仕事）	職業に関する用語の手話単語を覚える。仕事に関する文を手話で表現できるようになる。
12	語彙を増やす（医療・福祉）	医療・福祉に関する用語の手話単語を覚える。医療・福祉に関する文を手話で表現できるようになる。
13	語彙を増やす（旅行）	旅行に関する用語の手話単語を覚える。旅行に関する文を手話で表現できるようになる。
14	手話で自己紹介する	自身のエピソードを交え手話で自己紹介ができるようになる。
15	本講義の統括	本講義の統括、まとめ。今後の地域社会における手話社会の展望等を考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	本講義は、手話でコミュニケーションができることを最低限の到達目標と捉えており、講義外の練習は必要である。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 30 %）☑ 実技試験　（ 40 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	わたしたちの手話学習辞典Ⅰ（全日本ろうあ連盟出版局）
参　考　書	授業時に紹介する。
授業の留意点・備考	授業中に、手話単語、表現、意味を説明しながら進める。

科目名	スタディスキル	担当教員	大石 宝予 菊池 仁美 西本　守

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	人文科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	10年以上におよぶ専門学校での教育経験と広報に携わった経験を活かし、医療人としての心構えや今後の学校生活で必要な学習の進め方などの指導ができる。また、看護学科教員や元高校教諭経験者と共にチームワークの考え方やノートの取り方等の講義が実施できる。
授　業　概　要	専門学校における学習の意義や心構え、基本的なスタディースキルを習得することを狙いとし、ここで得られた基本的学習スタイルは、全ての専門教科・専門基礎教科を学ぶための共通技能となる。また、学校生におけるルールやそれを守ることの意義、過ごし方についても考える。
到　達　目　標	専門学校における学習の意義について説明できる。授業を受ける上での心構えについて説明できる。効果的な集中の仕方・記憶の方法について実践できる。効果的な文献の読み方、専門書の活用の仕方、学習補助ツールの活用について実践できる。効果的な自宅学習の進め方・ノートの取り方について実践できる。あらためて自己目標を見つめ直す。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション （大石・菊池）	オリエンテーション。医療人としての倫理観など、心構えについて学ぶ ◆課題：感想を提出する
2	学校生活におけるルールについて① レポートの書き方とルール　（大石）	レポート表紙の書き方やレポート提出のルール、レポート表紙規定やレポート本文規定について学ぶ　◆課題：前回の授業の課題をに表紙を付け提出する
3	文章の書き方について （大石・西本）	前回提出した課題（感想文）を元に文章の書き方を学ぶ
4	学校生活におけるルールについて② 図書室の利用について　（大石）	基本的な図書室の利用方法について学ぶ
5	書籍の活用法 （大石）	図書室で興味ある雑誌を選び、文章の書き方（３回目講義）を元に感想をレポートとして提出する
6	ノートの取り方① （大石）	ノートのまとめ方について学び、演習する
7	ノートの取り方② （大石）	ノートのまとめ方について学び、演習、発表する
8	動画の内容のまとめ方について① （大石）	動画視聴した場合のノートのまとめ方について学ぶ
9	動画の内容のまとめ方について② （大石）	動画視聴した場合のノートのまとめ方について演習する　提出課題とする
10	模擬講義（未学習の疾患を体験する）① 模擬講義の内容をノートにまとめる（大石）	授業におけるノートのまとめ方応用編、演習する
11	模擬講義（未学習の疾患を体験する）② 模擬講義の内容をノートにまとめる（大石）	授業におけるノートのまとめ方応用編 小テストの活用について学び、演習、提出する
12	学校生活における学びとの向き合い方① 目標設定　（大石）	これまでの学習内容と想定していた内容とのギャップについて考え、他者の意見を統合する
13	学校生活における学びとの向き合い方② 目標達成を考える　（大石）	これまでの学習内容と想定していた内容とのギャップについて考え、今後の学校生活についての学びを主観的に捉える
14	事例課題 （大石）	学校生活あるあるについて、事例を通し、考え、解決方法についてグループ討議とし、今後の学校生活に活かす
15	事例課題・総合まとめ （大石）	学校生活あるあるについて、事例を通し、考え、解決方法についてグループ討議とし、今後の学校生活に活かす→総合まとめ、課題提出

準備学習（予習復習）の具体的な内容	ここで学んだ内容を、日々の学習や学校生活に活かすこと
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（　　%） ☑ 課題　（　　%）☑ 発表　（　　%）☑ その他（レポート/課題/発表を総合し100%の評価とする）
教　科　書	なし　※資料は教員が準備します
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	参加型の授業の際は、学生同士で積極的に意見を交わすこと

科目名	キャリアワーク	担当教員	有働　正二郎

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		
担当教員の実務経験	様々な分野での作業療法士として働いた経験と専門学校での教育経験や教員研修において教育学を学んだことを活かし、セラピストとしてのキャリア教育を行うことができる。										
授業概要	自分自身のキャリア（仕事人生）を主体的に設計・選択・決定できるように、グループワークを通し自分の考え方だけでなく他人の考えを知り、より理解を深めていく。										
到達目標	①効果的な話し合いをするためにｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学習の目的を確認して、学習方法の共通理解をする。 ②自分の人生を振り返り、自分自身（考え方や性格・価値観・能力・強み・弱み等）について知る。 ③「実際に働く事とは？」を聞いたり、調べたりしながら、また、働く人からも声を聴き、互いに知識の共有をはかりたい関する。 ④多様な役割に対する自らの志向性を認識し、そのうえでキャリアプランを考え、共に学びあう仲間からエールをもらう。										

授業計画

回	テーマ（順不同）	授業内容（順不同）
1	オリエンテーション	自分自身のキャリア（仕事人生）を主体的に設計・選択・決定できるように、考えを深めていく。
2	チーム学習を進めるためのヒント	グループワークを行う上でのルールや、役割を学び実践する。
3	自己理解　過去を振り返ろう！	自分の過去を振り替えり、友人の話を聞くことで気付きを得る。
4	自己理解　自分を知る手がかり	自分が将来の方向性を決定する上で、どんな視点で考えているのか知る。
5	自己理解　私の大切なもの探し	自分が何を大切にしているか知り、友人の話を聞き気付きを得る。
6	自己理解　私ってどんな人？	自分がどのような人間かを考え、相手に伝えることで気付きを得る。
7	自己理解　なぜ働くの？	働くことの意味や必要性を知り、将来のモチベーションへ繋げる。
8	仕事理解　地図を作ってみよう！	言語聴覚士の働く環境を知り、多職種との関わりについて知る。
9	仕事理解　ケーススタディで学ぶ実際の仕事	言語聴覚士の話を聞き実際の仕事内容について気付きを得る。
10	仕事理解　インタビューしてみよう！①	言語聴覚士だけでなく、様々な職種の人にインタビューを行い気付きを得る。
11	仕事理解　インタビューしてみよう！②	言語聴覚士だけでなく、様々な職種の人にインタビューを行い気付きを得る。
12	仕事選択　未来カード①	自分の将来のキャリアを思い描き、形にすることで気付きを得る。
13	仕事選択　未来カード②	自分の将来のキャリアを思い描き、形にすることで気付きを得る。
14	仕事選択　背中にエール①	自分の将来のキャリアを思い描き、形にすることで気付きを得る。
15	仕事選択　背中にエール②	自分の将来のキャリアを思い描き、形にすることで気付きを得る。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	特になし
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 60 %） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 40 %）☐ その他（　　）
教科書	特になし
参考書	チーム学習型キャリア教育ワークブック　やる気の根っこ
授業の留意点・備考	特になし

科目名	総合教育Ⅱ/キャリアワーク	担当教員	越地　真一郎

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	新聞社での取材・編集や、それを生かした教育現場でのＮＩＥ（教育に新聞を）活動
授　業　概　要	どんな仕事（職種）であれ、それを行っていく上で必要とされる力＝社会人基礎力を磨く。「社会を知る⇒考える⇒伝える」という学習サイクルを重視し、実社会につながる実践的な学びを目指す。
到　達　目　標	・国内外や地域のさまざまな問題に目を向け、社会人としての“常識”を身につける。 ・グループ活動の中で相手の思いを理解し、自分の考えを的確に言えるようになる。 ・発表や討論に慣れ、アドリブでの対応を怖がらないようになる。

授　業　計　画

回	テーマ（順不同）	授　業　内　容（順不同）
1	社会に目を向ける	ニュース穴埋め＋コメント
2	「伝える」から「伝わる」へ	相手に届く伝え方
3	答えは一つじゃない	「正解のない問い」にどう答えるか
4	要約のワザ	言いたいことは何か～要点をつかむコツ
5	結論ファースト	結論を先に示し、理由・根拠を後で述べる表現法
6	言葉に強くなる	記事の見出しを組み合わせた川柳づくりなど、ゲーム感覚で言葉に親しむ
7	シンポン（新聞×本）バトル	活字メディア（新聞と本）を組み合わせたプレゼンテーション大会
8	まとめ	授業総括、課題文作成
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	日頃からニュース（世の中のいろいろな出来事）に関心を持つこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 50% ）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 50 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	なし
参　考　書	
授業の留意点・備考	人前で話したり、文章を書くことに対する苦手意識を捨てること。 「習慣は才能を超える」を信条に!!

科目名	総合教育Ⅱ/キャリアワーク	担当教員	田畑　博敏

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	約35年にわたり、大学で「哲学」や「論理学」等の人文系科目の教育研究に従事した経験を生かして、文章表現・読解の指導ができる。
授　業　概　要	自分の意見や、調べた情報を、的確な文章に表現できることを目指す。そのために、語彙・文法の理解、資料分析の方法、文章読解の要点を学ぶ。手紙文や意見文の例を学び、自分で文章を書く練習をする。
到　達　目　標	本講義により、受講者は、日本語の文章を正しく読解し、その内容をわかりやすい日本語の文章に表現できるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ（順不同）	授　業　内　容（順不同）
1	語句及び語彙	文章に出てくる語句・語彙の意味を正しく知る
2	文法	文法的に正しい言い方・表現法を学ぶ
3	資料分析	表やグラフ等の資料の分析方法を学ぶ
4	文章読解	文章読解の基本を学ぶ
5	文章読解	文章読解の技術を深める
6	手紙文	手紙文についての基本知識を学ぶ
7	意見文	意見文を読解し、自分で書いてみる
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	参考書の指定部分を予め読む。授業内容を深めるため復習する。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 90 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	基礎から学べる！文章力ステップ　文章検3級対応：公益財団法人日本漢字能力検定協会 文章検公式テキスト3級：公益財団法人日本漢字能力検定協会
参　考　書	
授業の留意点・備考	国語辞典（電子書籍で可）を持参すること。自分の考えを他者に伝えるにはどうすべきか、常に考えること。

科目名	情報処理	担当教員	山下　雄一郎（非常勤講師）

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	私は日頃からクライアント向けに、Wordで仕様書や報告書、Excelで分析レポート、PowerPointで企画書や提案書を作成し、情報を処理・提供する業務を行っています。これらの実務経験を活かし、学生に対して実践的な情報処理の学習を進めます。
授業概要	臨床現場は電子カルテが多く使用され始め、業種を問わずそのスキルが必要とされています。また、実習や学内での授業においても、レジュメ作成やレポート作成等にパソコンを使用します。当授業では、パソコンの基本操作をはじめ、ワード、エクセル、パワーポイントといった基本的なアプリケーションを使い方を教授します。
到達目標	●PCの基本的な操作方法を習得する。 ●実践的な文書作成や表計算方法、スライド作製方法を習得する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	文書作成①　（山下雄）	ワード文章にチャレンジする。実践練習問題1
2	文書作成②　（山下雄）	ワード文章にチャレンジする。実践練習問題2
3	文書作成③　（山下雄）	より実践的なワード文章の作成に必要なスキル習得　模擬問題１～
4	文書作成④　（山下雄）	より実践的なワード文章の作成に必要なスキル習得　模擬問題２～
5	表計算シート作成①　（山下雄）	表計算にチャレンジする。実践練習問題1
6	表計算シート作成②　（山下雄）	表計算にチャレンジする。実践練習問題2・3
7	表計算シート作成③　（山下雄）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題１～
8	表計算シート作成④　（山下雄）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題２～
9	表計算シート作成⑤　（山下雄）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題３～
10	表計算シート作成⑥　（山下雄）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題４～
11	スライド作成①　（山下雄）	メイン画面の名称と機能を把握する（アウトライン操作、図形作成、マスター管理）
12	スライド作成②　（山下雄）	スライド作成（画像の挿入加工、グラフ作成、テーマ選択、スライド追加・入替等）
13	スライド作成③　（山下雄）	プレゼンテーション準備（文字やグラフの見栄え整理、ノートの記入）
14	スライド作成④　（山下雄）	プレゼンテーション実施（発表者スライド、レーザーポインターの表示など）
15	総括とまとめ　（山下雄）	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業初日にキーボード操作の確認を行いますので、各自キーボード操作が出来るようにしておくこと（350字程度） ページ数を決めて入力練習をするようにと伝える。
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 90 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	30時間でマスター　Office2021：実教出版
参考書	Word文書処理技能認定試験 3級問題集【2016対応】：ウイネット Excel表計算処理技能認定試験3級問題集【2016対応】：ウイネット
授業の留意点・備考	操作指示と異なる内容（関係の無いサイトの閲覧など）に講じた場合は、即退出させ欠席扱いとする。 理解が早い生徒に関しては上位資格の試験対策を行います。

科目名	統計学	担当教員	緒方　茂

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	臨床・教育の領域において、臨床研究および基礎研究によるさまざまな研究デザインに対する統計的手法を実践できることにより、将来臨床で必要な統計リテラシーの学習を行う事が出来る。
授　業　概　要	医学系とくにリハビリ領域における研究にて用いられる統計学的手法について学ぶ。例題をもとに電卓や統計ソフトを使用した簡単な統計学的手法を実践する。また身近なデータから統計手法を選択し考察を交えた推論ができるようになる。
到　達　目　標	統計学の概要を大まかに捉えて、統計学の専門用語である正規分布や特性値、各統計的手法を理解できる。さらに例題を通して理解を深め簡単なデータにおける統計処理が出来るようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	統計学を学ぶ意義を理解する。
2	統計学の概念と歴史	統計学の概念と過去の歴史から統計学がどのように人類に恩恵をもたらしたか理解する。
3	データの種類と整理	各尺度の種類と特性を理解し、中央値・平均値・最大値・最小値・標準偏差などを理解する。
4	データ整理とヒストグラム作成	例題のデータからヒストグラムを作成し、さらに正規分布の特性を理解する。
5	名義尺度の変数に対する統計学的検定（1）	名義尺度の理解を深め、さらに名義尺度で使用する統計手法を覚える。
6	名義尺度の変数に対する統計学的検定（2）	名義尺度の例題データを使用し、統計手法の選択から使用までを身につける。
7	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（1）	間隔尺度・比率尺度の理解を深め、その統計手法が選択できるようにする。
8	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（2）	間隔尺度・比率尺度における統計手法を選択できる手順を例題データから演習を通して覚える。
9	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（3）	間隔尺度・比率尺度における統計手法を選択できる手順を例題データから演習を通して覚える。
10	順序尺度の変数に対する統計学的検定（1）	順序尺度の理解を深め、対応のあるデータで統計手法が選択でき結果まで出せるようにする。
11	順序尺度の変数に対する統計学的検定（2）	順序尺度の理解を深め、対応の無いデータで統計手法が選択でき結果まで出せるようにする。
12	順序尺度の変数に対する統計学的検定（3）	例題を通して統計手法を身につける
13	相関・回帰直線（1）	相関分析の概念とその流れを理解する。
14	相関・回帰直線（2）	例題を通して演習において相関分析・回帰分析を身につける。
15	まとめ	レポート及び定期試験のオリエンテーション

準備学習（予習復習）の具体的な内容	その日に学習したものを、教科書や資料を確認しながらしっかり復習するように
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	対馬栄輝他『リハビリテーション統計学』中山書店
参　考　書	渡邊宗孝他『PT・OTのための統計学入門』、三輪書店 杉山高一他『保健・医療を学ぶ人のための統計学』絢文社 対馬栄輝『SPSSで学ぶ医療系データ解析』東京図書
授業の留意点・備考	・講義ではデータ処理にて数を扱うが、数字に対して苦手意識を持たず取り組むこと。 ・「なぜ、このような統計学的手法が必要なのか」という意識を持ちながら授業に臨むこと。

科目名	社会福祉学	担当教員	紫藤　千子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	社会科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士として、長年にわたる福祉の現場での実践経験を踏まえて、より具体的な講義、GWなどの演習を行うことができる。
授業概要	私たちの生活を考察し、ライフスタイル、社会の変化について理解を深め、社会保障制度等の仕組みについて学ぶ。介護保険、障害者総合支援法、その他諸制度について学び理解を深める。また、制度改正に関しても情報提供を受け、時代の動きを理解する。クライエントをサポートするために必要な、医療・保健・福祉の連携について理解する。
到達目標	クライエントを、生活する人としてとらえ、その暮らしに関わっていくことを理解する。様々な社会福祉の基礎知識を得て、社会福祉制度に関して理解を深め、今、社会福祉がどのような現状にあり、課題を抱えているのか知り、考察する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	福祉とは	授業のオリエンテーション。「福祉とは」考えてみる。
2	社会と生活のしくみ	「生活」について、家族、地域、社会の視点で学ぶ。地域共生社会について学ぶ。
3	日本の社会保障制度①	社会保障の基本的な考え方を学ぶ。日本の社会保障制度の歴史を学ぶ。
4	日本の社会保障制度② 現代社会と社会保障制度	日本の社会保障制度の歴史を知る。現代社会の特徴を学び、今後の社会保障の在り方について考える。
5	社会保障制度 障がい者保健福祉①	現代社会の特徴を学び、今後の社会保障の在り方について考える。 障がい者福祉の現状について学ぶ。
6	障がい者保健福祉②	障がい者福祉の動向。障がい者福祉に関する法体系について学ぶ。
7	障がい者総合支援制度	障害者総合支援法のしくみを学ぶ。
8	個人の権利を守る制度①	権利擁護について学ぶ。虐待防止法の考え方、法制度について学ぶ。
9	高齢者福祉	高齢者福祉の歴史を学び、これからの高齢社会を考える。介護保険制度の今後の動向について学ぶ。
10	介護保険法①	高齢者福祉に関する法体系を学ぶ。介護保険制度の背景と目的を学ぶ。
11	介護保険法②	介護保険制度のしくみを理解する。専門職の役割。介護サービスについて学ぶ。
12	個人の権利を守る制度②	判断能力の低下した人の支援について学ぶ。
13	貧困対策・生活困窮者支援制度	生活保護法、生活困窮者自立支援法のしくみを知る。
14	認知症の理解	認知症について学び、認知症の理解を深める。
15	認知症ケアについて	認知症の人への接し方を学び、考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでくる。
成績評価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	最新　介護福祉士養成講座２　社会の理解（中央法規）
参考書	
授業の留意点・備考	・グループワークを行う際は、積極的に参加すること。 ・授業中の私語はしないこと。

科目名	カウンセリング概論	担当教員	井田　博子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床心理士（カウンセラー）としての経験から、来談者の力を引き出し支援する様々のとりくみを紹介し、リハビリテーション実践に活かせる視点を提供したい。
授　業　概　要	心理臨床の中心的な課題を、実際的な観点から深め、人間理解と臨床のセンスの基礎を身につけられるようにする。
到　達　目　標	心理臨床の基礎を学び、対人関係を有効に用いた支援から、リハビリテーション実践に役立つ観点を身につける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション「自我の強さと悩む力」	自我の強さは年令によって、経験によって、育つものであることを学ぶ。
2	心理査定と心理療法	心理的支援の前に来談者の状況や問題点等をとらえることの重要さを示す。
3	個人療法と集団療法	来談者とセラピストの1対1関係だけでなく、グループを用いる治療についても学ぶ。
4	家族療法とその他の心理療法	子どもの問題では、家族間コミュニケーションの調整が有効であることを学ぶ。
5	ストレスと心理的反応	多忙やコミュニケーション不全等の様々のストレスと心身の不調について考える。
6	心の病のいろいろ	体質的問題の大きいものや、生育上の環境に関連するもの等の紹介をする。
7	文化や文明とストレス	ハイテクの生活環境と心身の自然について考える。
8	心の健康	日頃からとりくむ心の健康への留意点を紹介する。
9	心理テストの種類	心理テストから理解される個人差（個性）について考える。
10	性格と無意識の行動	本人の行動パターンには自覚できる部分と無自覚の部分があることを知る。
11	性格とストレス耐性	本人の認知や行動のパターンとストレスへの強さ弱さについて考える。
12	自己理解と他者理解	思春期・青年期の友だち関係などから自・他の理解が広がることを学ぶ。
13	事例から学ぶ（1）	日常の対人関係でも出会う、了解できにくい言動について考える。
14	事例から学ぶ（2）	他者の言動の理不尽さに巻き込まれた事例の紹介と自らの言動の理不尽さに気づいた事例の紹介。
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	シラバスや配布された資料をよく読み、なじみのない言葉や言葉づかいは、辞書で調べておき、はっきりしない場合は質問すること。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	講師の先生が資料を準備
参　考　書	宇治原寛・杉原保史共編『臨床心理学入門　理解と関わりを深める』培風館
授業の留意点・備考	この教科の配布資料は、他の教科のものとは別に、単独のファイルにすること。

科目名	英語Ⅰ	担当教員	小野　厚美

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	医学英語							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	中高大学専門学校での英語教育、急性期病院での勉強会時に行っていた文献和訳の経験を活かして、学生が臨床時に困らない程度の医学用語の英単語を身につけさせることが可能である。
授　業　概　要	・言語聴覚士として必要な医学用語、英略語を身につける ・医学用語の知識を利用して障害・疾患についての理解を深める ・海外文献の取り扱いと翻訳・引用・参考時の基礎作りを行う
到　達　目　標	・言語聴覚障害の基本的な医学用語・英単語を身につける。 ・他職種特に医師から提示される医学英単語の意味がわかる。 ・カルテなどに英語で書かれた障害や疾患の意味がわかる。 ・英語の抄録が読める前段階として基礎的な英単語を身につける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	授業オリエンテーション	授業の進行と小テストについて、医学英語について
2	言語聴覚障害概論Ⅰ　英単語	言語聴覚障害概論の医学用語について学び、暗記する。
3	ヒトの動きと医学英語	関節の動きと医学英語について学び、暗記する。
4	骨名称と医学英語	頭蓋骨と四肢骨の医学英語について学び、暗記する。
5	脳と医学英語	大脳・小脳・脳幹・脊髄の医学英語について学び、暗記する。
6	臓器と医学英語	呼吸器系・消化器系・循環器系の医学英語について学び、暗記する。
7	脳血管障害の医学英語	画像・脳出血・脳梗塞の医学英語について学び、暗記する。
8	高次脳機能障害の医学英語	高次脳機能障害の医学用語について学び、暗記する。
9	構音障害の医学英語	構音障害の医学用語について学び、暗記する。
10	基礎医学の医学英語	基礎医学の医学用語について学び、暗記する。
11	臨床医学の医学英語	臨床医学の医学用語について学び、暗記する。
12	耳鼻咽喉科学の医学英語	耳鼻咽喉科学の医学用語について学び、暗記する。
13	医学検査の医学英語	一般的な検査と画像検査の医学英語について学ぶ、暗記する。
14	まとめ	
15	定期試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	事前に資料を配布するため、英単語確認しておくこと。また、習った英単語は復習すること。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	資料配布　※医学英単語の音声記号と日本語の音声記号の特徴を比較してみると今後の勉強に役立ちます。
参　考　書	資料配布
授業の留意点・備考	【担当教員からのコメント】知らない英単語が出てきても調べる努力を続けることで学習に繋がります。英語と日本語の違いに触れて、文献を読んでみて、疑問に思ったことは細かい部分でもすぐ相談して下さい。

科目名	英語Ⅱ	担当教員	ジェフェリーアランケアンズ

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活、社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	教育現場で培った経験を活かし、将来、医療現場で働く学生に学んでいて欲しい基礎的な知識を講義できる。
授業概要	医療及び看護の専門分野の英語文献資料を読解できる英語力を養う。
到達目標	To review and improve Emglish communication skills,Build practical English vocabulary;Expand English communication ability.（英語のコミュニケーション能力を伸ばすため、英語の語彙力を確立する。英語のコミュニケーション能力を発展させる。）

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	Orientation	orientation（オリエンテーション）
2	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Food
3	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Japan
4	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Shopping
5	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Music
6	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Transportation
7	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Work
8	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Family
9	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Travel
10	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Europe
11	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Famous People
12	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Sports
13	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Home
14	Vocabulary Practice（語彙の練習）	Communication Practice Topics -Health、Entertainment
15	Examination	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	all instruction done in English（講義は英語で行われます） Students are expected to communicate in English（授業中、学生は英語でコミュニケーションをとることが望ましい） monthly vocabulary quizzes（毎月英語の語彙クイズを実施します）
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	“Let's Talk About It” b y PERSON Longman Craig Drayton&Mark Gibbon
参考書	適宜、示す
授業の留意点・備考	a good "Learner's"dictionary will be needed by every student in every class（毎回、学習者用の辞書を持参すること。電子辞書でも構いません）

科目名	体育実技	担当教員	池田　泰介

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	中学校・高等学校の保健体育指導および社会教育施設でのスポーツ指導の経験を活かし、子どもから高齢者に対しての運動の必要性やスポーツの特性について、講義・演習を行うことができる
授　業　概　要	講義や実技を通して、健康の維持・増進に関する基礎的知識を学習し、各種スポーツの特性や技術およびトレーニングの方法についても理解を深め、スポーツの有効性について学ぶ
到　達　目　標	健康の定義や運動の必要性を説明できる。安全に楽しく運動ができる方法を習得する事ができる。障がい者スポーツの種類とルールについて説明できる。レクリエーション・スポーツの実施計画を作成することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	授業概要、達成目標、評価方法、授業の注意点、自己紹介
2	健康と運動	健康の定義および社会環境と体力について
3	トレーニング①	無酸素性のトレーニングとその効果
4	トレーニング②	有酸素性のトレーニングとその効果
5	心理的スキル	メンタルトレーニングの必要性
6	準備運動・体操	準備運動の必要性および実践
7	障がい者スポーツ①	障がい者スポーツの種目・特性
8	障がい者スポーツ②	ボッチャの特性およびルール・体験
9	スポーツ・レクリエーションの実施計画①	スポーツ・レクリエーションの実施計画作成
10	スポーツ・レクリエーションの実施計画②	スポーツ・レクリエーションの実施計画提出
11	スポーツ・レクリエーション①	ソフトバレーボールの計画・実施
12	スポーツ・レクリエーション②	車いすバスケットボールの計画・実施
13	スポーツ・レクリエーション③	卓球の計画・実施
14	スポーツ・レクリエーション④	バドミントンの計画・実施
15	まとめ	授業で扱った内容について筆記試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	運動のできる服装・体育館シューズ
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 50 %）☑ 実技試験　（ 30 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☑ 課題　（ 10 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	なし
参　考　書	健康・運動・スポーツのTopics(八千代出版)
授業の留意点・備考	体を動かす為、体調管理に努めること。 体調が良くない場合は無理をせず担当教員に伝え見学すること。 運動を実施する場合は積極的に参加すること。

科目名	運動科学	担当教員	小野　厚美

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	人体の構造と機能及び心身の発達							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床に携わった経験を活かし、リハビリテーションにおいて理解すべき小児の運動発達について講義・指導ができる
授　業　概　要	小児の運動発達の基盤となる発達概念、発達理論を理解し、姿勢反射、反応から始まる正常な運動発達を時期とともに段階的に学ぶ。
到　達　目　標	正常な小児の運動発達を学習し、どのような順番で運動を獲得していくのかを説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	小児の運動発達のイメージを作る。
2	発達概念	人間発達を表現する用語や発達の流れを学ぶ。
3	人間発達（発達理論）	発達理論モデルを理解する。
4	姿勢反射・反応①	姿勢反射・反応の出現と消失を時期とともに学ぶ。
5	姿勢反射・反応②	姿勢反射・反応の出現と消失を時期とともに学ぶ。
6	運動発達（０～３ヶ月）	０～３ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
7	運動発達（４～６ヶ月）	４～６ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
8	運動発達（７～９ヶ月）	７～９ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
9	運動発達（１０～１２ヶ月）	１０～１２ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
10	運動発達（１３～１８ヶ月）	１３～１８ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
11	上肢機能の発達	上肢機能と物の操作の発達を学ぶ。
12	ＡＤＬの発達①	遊び・食事・排泄･更衣の発達を学ぶ。
13	ＡＤＬの発達②	遊び・食事・排泄･更衣の発達を学ぶ。
14	感覚・知覚・認知・社会性の発達	感覚・知覚・認知・社会性の大まかな発達を学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料を参考に復習する事
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	イラストでわかる人間発達学　医歯薬出版株式会社
参　考　書	
授業の留意点・備考	配布資料をファイルし整理する事

科目名	医学総論	担当教員	大石　逸子

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	訪問看護活動、病院での退院調整、地域連携、介護保険事業での地域行政との関わりの経験を活かし、病院から地域への移行支援、在宅療養支援の実践事例を交えて講義する事ができる。
授業概要	・医療とは何かを学ぶ。 ・医療人としての生き方くを学ぶ。 ・医療人に必要なコミュニケーションについて学ぶ。 ・医療人として医療全体を見渡す視野・医療システムを学ぶ。
到達目標	・医学の概要について説明できる。 ・医療人の持つべき倫理について説明できる。 ・医療人に必要なコミュニケーション技術を実践できる。 ・医療システムを理解し事例をもとに考えることが出来る。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション 患者の立場に立った医療とは何か	自らの医療体験・患者体験を振り返り、患者の立場に立った医療とは何かをディスカッションする。
2	医療現場の倫理	医療人の倫理に関する文書を読んでその精神をつかみ、自分たちの誓詞を作成し各班で発表する。
3	人の気持ちを慮ること 情報共有とチーム医療	ロールプレイを通して人の気持ちを理解する。（レポート）各専門職の役割を知り、情報収集の体験をする。
4	カウンセリングによる自己決定支援 医療職のプロフェッショナリズム	(1) (2) (3) の小テスト 3つの対話ステップを体験し、エビデンスと患者の希望の大切さを知る。各自「ロールモデル」を発表する。
5	多様な健康観と医療観 健康の決定要因	健康の決定要因を学び、健康を他面的にとらえる判断基準を知る。
6	ICF（国際生活機能分類）とリハビリテーション	ICFの概観を学び、自己の課題を分析し、自己の幸福・健康を高めるための個人因子を評価する。
7	well-being（幸福・健康）を高める支援 医療職の役割	(4) (5) (6) の小テスト 各班で1事例をストレングス・モデルでエンパワーメントし発表する。
8	近代医学の誕生と感染症対策 生活習慣病の予防	近代医学の誕生と感染症対策の関係を知る。生活習慣病の危険要因を理解する。
9	遺伝医学から遺伝医療の課題 医療・情報テクノロジーの課題	遺伝的疾患に関する正しい知識を知り、自己の偏見や差別に気づく。科学技術を用いる心構えを発表する。
10	健康影響をもたらす環境問題	(7) (8) (9) の小テスト 公害を理解し、未知の課題を考える。薬害エイズから学ぶ医療人としての倫理。
11	全人的総合医療とは 臓器移植からから再生医療へ	現代西洋医学と補完代替療法を融合するメリットを知る。臓器移植・再生医療のメリットと課題。
12	健康を次世代につなぐ 科学的根拠とこれからの医療	予防の3段階を理解し、EBM手順を用いて家族・自分の問題を考える。（レポート）
13	地域包括ケアシステムと多職種連携	(10) (11) (12) の小テスト 地域包括ケアシステムを理解し、専門職としていかに連携するのか。
14	医療保険制度と介護保険制度	医療保険制度・介護保険制度のシステムと現状・課題。
15	医療安全と医療職に求められる態度	医療事故防止と医療事故への対応。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	コースパケットを1時間目に配布するので毎回の講義の前にその内容について読み、講義で何が行われるかを把握しておくこと。
成績評価	☑ 定期試験 （ 60 %）☐ 実技試験 （ %）☑ 小テスト （ 20 %）☐ レポート （ 20 %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	学生のための医療総論第3版増補版　医学書院
参考書	なし
授業の留意点・備考	過重な課題は与えないのでその分講義中には積極的に真剣に参加すること。医療人としての資質が問われる厳しい講義だということを理解してほしい。

科目名	解剖学Ⅰ	担当教員	遠山健一

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	人体の構造と機能及び心身の発達							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	急性期、回復期、維持期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、神経系の解剖について講義することができる。
授業概要	人体を構成している神経系の成り立ちを理解する。療法士に必要不可欠な神経系について系統的に学習していく。神経疾患はリハビリで扱う代表な部分である、疾患理解のために、 各部位の位置関係、働きも学習していく。
到達目標	神経系の構造、位置関係を認識する。神経系の働きを理解する。疾患や検査、治療のために神経系の学習が必要であることを知る。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	神経系総論について	神経系の概要について学習する
2	神経系の循環について	脳血管系と脳室について学習する
3	脊髄について	脊椎や脊髄神経について学習する
4	脳幹について	中脳・橋・延髄について学習する
5	小脳について	小脳中部・小脳半球について学習する
6	間脳について	視床、視床下部について学習する
7	終脳について①	大脳皮質や灰白質について学習する
8	終脳について②	大脳基底核や大脳辺縁系について学習する
9	伝導路について①	下行性伝導路について学習する
10	伝導路について②	上行性伝導路について学習する
11	末梢神経について①	脊髄神経について学習する
12	末梢神経について②	神経叢について学習する
13	末梢神経について③	脳神経について学習する
14	末梢神経について④	自律神経について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習(予習復習)の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験 (80 %) ☐ 実技試験 (%) ☑ 小テスト (20 %) ☐ レポート (%) ☐ 課題 (%) ☐ 発表 (%) ☐ その他( )
教科書	標準理学療法学・作業療法額　専門基礎分野　解剖学　第５版：医学書院
参考書	適宜資料を配布する
授業の留意点・備考	小テストを実施するため、予習、復習を心がけること。

科目名	解剖学Ⅱ	担当教員	吉永　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学医学部（医学科・保健学科）並びに医療系専門学校において解剖学の講義・実習を長年担当した経験を活かし、言語聴覚士養成のための解剖学の講義を行うことができる。
授　業　概　要	解剖学では人体を構成する各器官の構造と立体配置について学習する。そのうち、解剖学Ⅱでは医療および疾患の理解に必要な感覚器および内蔵諸器官の正常構造について系統的に学習する。
到　達　目　標	・人体を構成する各器官の構造と立体配置を説明できる。 ・解剖学の基礎的知識を身につける。 ・解剖学の知識を各種検査や治療手技へ応用できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	感覚器系①	感覚器系の全体像、外皮について学ぶ。
2	感覚器系②	視覚器、平衡聴覚器①について学ぶ。
3	感覚器系③	平衡聴覚器②、味覚器、嗅覚器について学ぶ。
4	循環器系①	循環器系の全体像、心臓について学ぶ。
5	循環器系②	動脈系について学ぶ。
6	循環器系③	静脈系について学ぶ。
7	循環器系④	胎児循環、リンパ系について学ぶ。
8	消化器系①	消化器系の全体像を学ぶ。
9	消化器系②	消化管（口腔、咽頭、食道、胃、小腸、大腸）について学ぶ。
10	消化器系③	消化腺（肝臓、胆嚢、膵臓）と腹膜について学ぶ。
11	呼吸器系	鼻腔、（咽頭）、喉頭、気管、気管支、肺について学ぶ。
12	泌尿器系	腎臓、尿管、膀胱、尿道について学ぶ。
13	生殖器系	生殖系器官（男性、女性）について学ぶ。
14	内分泌系	内分泌系器官（下垂体、松果体、甲状腺、上皮小体、副腎、膵島など）について学ぶ。
15	まとめ	重要事項の復習

準備学習（予習復習）の具体的な内容	・毎回の講義内容について、教科書を一読しておく。 ・その日の講義内容を復習し、重要なポイントを整理しておく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野　解剖学（医学書院）
参　考　書	参考資料を適宜配布
授業の留意点・備考	不明な点は、積極的に質問すること。

科目名	生理学	担当教員	遠山　健一

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	4	時数	60	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	人体の構造と機能及び心身の発達							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床における各種疾患を解剖学及び生理学的視点から見て来た経験を活かし、理学療法士、作業療法士、言語聴覚療法士のための生理学の講義を行うことができる。
授　業　概　要	生理学は生命活動のしくみを解き明かすことを目的とした学問であり、解剖学と密接に関連した医学の基礎となるものである。まず、生命現象の基本となる細胞機能、ついで植物と動物に存在する機能、そして動物に特有な機能として、生理学を理解していく。
到　達　目　標	生理学における重要事項を説明できる。器官・組織の機能とその仕組みを説明できる。生理機能と理学療法・作業療法・言語聴覚療法と関連を説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション・PT,OTにとっての生理学	生理学とは
2	生命現象と人体　浸透圧、水分、体温①	身体の階層性
3	生命現象と人体　浸透圧、水分、体温②	生命現象、水
4	生命現象と人体　浸透圧、水分、体温③	体温、ホメオスタシスと負のフィードバック
5	細胞の構造と機能①	細胞の構造と機能
6	細胞の構造と機能②	静止膜電位と活動電位
7	神経の興奮伝導と末梢神経①	神経細胞の構造、興奮の発生と伝導
8	神経の興奮伝導と末梢神経②	末梢神経の種類
9	神経の興奮伝導と末梢神経③	自律神経
10	神経の興奮伝導と末梢神経④	シナプスにおける興奮の伝達
11	中枢神経①	中枢神経とは、脊髄
12	中枢神経②	脳幹、小脳
13	中枢神経③	間脳：視床と視床下部、大脳皮質
14	中枢神経④	脳の高次機能、大脳基底核、辺縁系、脳室と脳脊髄液・血液脳関門
15	筋と骨①	筋の分類、骨格筋

授　業　計　画		
回	テーマ	授　業　内　容
16	筋と骨②	心筋
17	筋と骨③	平滑筋
18	筋と骨④	骨
19	感覚①	感覚とは
20	感覚②	体性感覚
21	感覚③	内臓感覚
22	感覚④	特殊感覚
23	血液①	血球の組成、赤血球・白血球の役割を学ぶ(遠山)
24	血液②	血液の凝固・線溶、血漿成分、血液型を学ぶ(遠山)
25	血液③	非特異的生体防御、免疫反応、Tリンパ球・Bリンパ球を学ぶ(遠山)
26	血液④	自然免疫・獲得免疫、液性免疫・細胞性免疫を学ぶ(遠山)
27	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う(緒方・遠山)
28	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う(緒方・遠山)
29	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う(緒方・遠山)
30	まとめ	定期試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んで予習をする。講義プリント、練習問題を復習し、小テストの準備を行う。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学　第6版：医学書院
参　考　書	からだがみえる　人体の構造と機能　MEDIC MEDIA
授業の留意点・備考	・授業中に講義内容と関連した復習、グループ学習を行うため、ノート等を準備しておく。 ・小テストは事前に告知するため準備しておく。小テストを欠席した場合は担当教員へ1週間以内にコンタクトをとること。コンタクトがない場合は評価対象外とする。 ・疑問点が生じたときは教科書や参考書、担当教員を積極的に活用すること。

科目名	栄養・摂食嚥下機能学	担当教員	冨永　志保 田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	管理栄養士として病院や老健で勤務した経験を活かし、リハビリテーションを実施していくうえで必要な栄養素等について講義できる。急性期病院での摂食嚥下機能療法業務と患者の栄養管理経験を活かして、摂食・嚥下障害の評価・治療に関する体系的かつ実践的な知識と技術を伝授することができる。
授　業　概　要	臨床現場でPT・OT・STによる機能訓練を行う患者の多くが高齢者である。リハビリを行うだけでなくADL・QOLを向上させるためには適切な栄養管理が必要である。 栄養と摂食・嚥下の関連性について理解する。
到　達　目　標	栄養素の基礎、三大・五大栄養素について学ぶことにより病気の発症・治療・食事の関係について理解できる。又、自分の食生活について振り返り、自己管理できるよう学ぶことが出来る。 栄養と摂食・嚥下の関係について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	栄養学の基本知識	知っているようで意外と知らない栄養の基礎知識について学ぶ
2	栄養学の最新情報1	押さえておきたい基礎知識から栄養学の「今」を学ぶ
3	栄養学の最新情報2	押さえておきたい基礎知識から栄養学の「今」を学ぶ
4	栄養素の働きについて	5大栄養素から機能性食品まで。働きや接種基準まで。
5	症状別・栄養素の取り方	栄養・食の視点から身体の不調や病気への対策を学ぶ。
6	嚥下調整食分類2021（総論）	食事ととろみについて学ぶ。
7	とろみ剤の種類と特徴	基本的な使い方について（実習もやってみよう）
8	摂食嚥下とは	摂食嚥下についてのオリエンテーション
9	摂食嚥下のメカニズム	摂食嚥下の概略を学ぶ
10	栄養について	栄養の基礎及び栄養管理について
11	栄養の阻害因子について	摂食嚥下のメカニズムに基づいて、栄養の阻害因子を学ぶ
12	代償栄養法	摂食嚥下障害で引き起こされる栄養欠如と代償栄養について
13	代償栄養法	摂食嚥下障害で引き起こされる栄養欠如と代償栄養について
14	フレイル及びサルコペニア	フレイル・サルコペニア・低栄養それぞれの機序及び予防リハについて理解する
15	フレイル及びサルコペニア	フレイル・サルコペニア・低栄養それぞれの機序及び予防リハについて理解する

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義資料を復習する。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	講師の先生および専任教員が分担して資料を用意する。資料だけでなく関連する内容について、テキストで予習・復習をすること。
参　考　書	リハビリテーションに役立つ栄養学の基礎(医歯薬出版) よくわかる栄養学の基本としくみ(秀和システム)、摂食嚥下リハビリテーション第３版（医歯薬出版）
授業の留意点・備考	分からないことを積極的に質問してほしい。とろみ剤や流動食の試飲等を予定しています。積極的に参加してください。

科目名	病理学	担当教員	熊本大学病院病理部

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	病理疾患の研究に携わった経験を講義に活用する。
授業概要	適切なリハビリテーションを実践するためには、疾病についての基礎的な知識を修得している必要がある。本講義では、疾病についての基礎的な知識や病態生理を教授し、さらに病理学の魅力についても伝えたい。
到達目標	・専門科目の学習に必要最低限の病理学的知識と、生涯学習の方法を修得すること。 ・疾病の基礎的な概念を理解している ・主な疾病の病態生理について説明できる。 ・問題解決型の学習法を修得している。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション 病理医とは	病理医について、病理医の主な仕事について学ぶ。
2	先天異常	病理学の概要、病因論（外因性疾患と内因性疾患）について学ぶ。
3	中枢神経	脳・神経系の疾患、感染症等について学ぶ。
4	免疫反応	自然免疫と適応免疫、アレルギー、免疫不全等について学ぶ。
5	循環器	虚血性心疾患、心筋症、心筋炎、先天性心疾患等について学ぶ。
6	泌尿器	腎臓・下部尿路の疾患について学ぶ。
7	呼吸器	上気道の疾患、腫瘍、下気道の疾患等について学ぶ。
8	血液疾患	赤血球系・白血球系・血小板・リンパ節の病理について学ぶ。
9	腫瘍総論	腫瘍の分類、形態学、組織学的特徴について学ぶ。
10	消化管・肝・胆嚢	各疾患について学ぶ。 肝障害、代謝異常、胆嚢および胆道等について学ぶ。
11	循環障害	循環器系の概要、構成、全身の循環障害、局所の循環障害について学ぶ。
12	感染症	日和見感染症、誤嚥性肺炎、結核症、肝炎ウイルスについて学ぶ。
13	運動器	骨粗鬆症の病態について、骨折修復のメカニズム等について学ぶ。
14	退行性・進行性病変	萎縮の種類について、褥瘡の原因、壊死とアポトーシスの違い、肥大と過形成等について学ぶ。
15	まとめ	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義ノートを復習する。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	わかりやすい病理学　改訂第7版（南江堂）
参考書	
授業の留意点・備考	今までの受動的な学習態度から脱却し、より充実した学習を行うために、自主的な学習態度を身に付け、積極的に疑問に思ったことは質問すること。

科目名	内科学	担当教員	藤本　和紀

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	内科臨床と係った経験を活かした講義を行うことができる。
授　業　概　要	各症候、疾病がどのようにして発生するかという内科的病態生理を基礎として、要点はプリント図表に入れ、講義の習得が容易となるように配慮する。
到　達　目　標	①国家試験の過去問題（10年程度）を十分に理解し、トレーニングを行い、思考力を育てる。 ②教科書、講師からの資料を研習し、グループワークを行う場合には、積極的に参加し意見を発表する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	循環器（Ⅰ）	循環器の解剖、病理を理解する。浮腫の診断ができる。
2	循環器（Ⅱ）	虚血性心疾患、左心不全、右心不全を理解する。
3	循環器（Ⅲ）	高血圧、末梢循環について学ぶ。
4	呼吸器疾患（Ⅰ） 風邪症候群、その他	風邪を理解するために、症状の分析、原因を知り、診断する思考力を学ぶ。
5	呼吸器疾患（Ⅱ） 閉塞性換気障害、拘束性換気障害	呼吸器の解剖、病理を復習し、代表的な疾患について学習する。
6	糖尿病	糖尿病とは、合併症、低血糖症状を理解する。
7	消化器疾患	主な疾患について学ぶ。
8	肝疾患	ウイルス肝炎、肝硬変症、その他について学ぶ。
9	内分泌	内分泌異常について学ぶ。
10	膠原病	膠原病、自己免疫疾患などについて学ぶ。
11	メタボリックとフレイル	メタボリックシンドローム、内臓脂肪と皮下脂肪、高齢者に見られるフレイル・サルコペニアについて学ぶ。
12	感染症	感染症、院内感染対策、標準予防法について学ぶ。
13	老年症候群、廃用症候群	高齢者の特有な疾患の内部障害を理解し、リハビリの臨床に役立たせる。
14	その他の内科疾患、腎不全など	主な疾患について学ぶ。
15	まとめ、復習	期末試験の対応について学ぶ。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	レポート（小テスト）を各テーマ毎に提出する。復習予習することで正確な解答を提出し、問題を解く思考力を育てる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	標準理学療法学作業療法学　専門基礎分野　内科学　第4版　（医学書院）
参　考　書	
授業の留意点・備考	内科学は単なる記憶の繰り返しではなく、症状を分析し、病理・解剖学などの知識を元に診断する。思考力が必要であることを理解する。

科目名	臨床神経学	担当教員	阪本徹郎・倉富　晶 永利聡仁・俵明恵

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医師としての臨床経験、知識を活かし、リハビリテーションに必要な神経内科学的疾患について講義を行うことができる。
授　業　概　要	神経内科学的疾患（特に脳梗塞や神経変性疾患など、成人の運動機能障害を生じる疾患を中心に）の概説を行う。
到　達　目　標	代表的な神経疾患の病態と診断、治療について総合的に理解する。具体的には、神経系の構成を理解し、機能障害が発生した場合にどのような症状が現れるか理解する。その障害に対し有効な治療（根治的／対症療法的／予防的、リハビリテーション／薬剤／その他）について、総合的に理解する。それを基礎に、神経疾患治療におけるリハビリテーションの目標・役割について理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	中枢神経系の解剖と機能	神経系の構成，中枢神経の構造・機能，末梢神経
2	神経学的診断と評価/神経学的検査法	診察手順，障害の評価/画像診断，神経生理学的検査，自律神経機能検査，腰椎穿刺
3	意識障害等、頭痛等、運動麻痺等、錐体外路症状等、運動失調、感覚障害	意識障害の原因，脳死，植物状態／頭痛の分類/運動麻痺の分類・原因・評価，筋萎縮の分類・評価／錐体外路の解剖・機能とその障害/運動失調の原因・評価／感覚障害の分布と特徴
4	高次脳機能障害、構音障害、嚥下障害、脳神経外科領域代表的症候群	総論，失語症，失認，失行，記憶障害，注意障害，遂行機能障害，構音障害，嚥下障害，頭蓋内圧亢進，脳浮腫，脳ヘルニア，髄膜刺激症状
5	脳血管障害①	頭蓋内圧亢進，脳浮腫，脳ヘルニア，髄膜刺激症状／頭蓋内出血
6	脳血管障害②	脳梗塞，一過性脳虚血発作，脳血管障害の診断と治療
7	認知症、脳腫瘍、外傷性脳損傷	認知症の症状と病因，診断と治療，脳腫瘍の診断と分類／外傷性脳損傷の診断と治療
8	脊髄疾患	脊髄損傷，脊髄腫瘍
9	変性疾患	脊髄小脳変性症，運動ニューロン疾患，脱髄疾患
10	錐体外路の変性疾患	パーキンソン病，パーキンソン症候群，不随意運動を主症状とする疾患
11	末梢神経障害、てんかん、	末梢神経損傷，末梢性ニューロパチー，てんかんの診断と治療
12	筋疾患	進行性筋ジストロフィー，ミトコンドリア病，先天性ミオパチー，多発性筋炎，周期性四肢麻痺，内分泌代謝性筋疾患，筋無力症
13	感染性疾患、中毒性疾患、栄養欠乏、小児神経	髄膜炎，脳炎・脳症，脳膿瘍，神経梅毒，クロイツフェルト・ヤコブ病，水銀中毒，有機リン系農薬中毒，一酸化炭素中毒，ボツリヌス中毒，脳性麻痺，二分脊椎
14	廃用症候群、排尿障害、性機能障害	廃用症候群，誤用症候群，合併症，排尿のメカニズム，神経因性膀胱／性機能障害
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業前にあらかじめ、講義内容を教科書で予習することが望まれる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　神経内科学　第5版(医学書院)
参　考　書	病気がみえるvol.7脳・神経　第2版(メディックメディア)
授業の留意点・備考	スライド映写（主要なスライドは配布資料を作成する）と教科書を主体に講義形式での授業を進める。

科目名	精神医学	担当教員	瀧本　文博

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	精神科領域の作業療法実務に携わった経験をいかし、精神医学において求められる基本的知識について講義を行う。
授　業　概　要	リハビリテーション実践の場で必要とされる精神症状や精神疾患を有する患者に必要な、基本的事項について学ぶ。
到　達　目　標	①精神医学の概要を説明することができる ②精神障害の成因と分類について説明することができる ③精神機能の障害と精神症状について説明することができる ④精神疾患について説明することが出来る

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 精神医学とは	本講義のオリエンテーション、精神医学とは、精神障害に関わる概念、精神障害の成因、精神障害の分類について学ぶ
2	精神機能の障害と精神症状①	精神機能の障害と精神症状、意識・知能とその障害を学ぶ
3	精神機能の障害と精神症状②	性格・記憶・感情①とその障害を学ぶ
4	精神機能の障害と精神症状③	感情②・欲動および意志・自我意識・知覚とその障害を学ぶ
5	精神機能の障害と精神症状④	思考①とその障害を学ぶ
6	精神機能の障害と精神症状⑤ 統合失調症及びその関連障害①	思考②・病識とその障害、統合失調症とは、統合失調症の疫学・成因ないし病態・精神症状の特徴を学ぶ
7	統合失調症及びその関連障害②	統合失調症の病型、経過と予後、治療とリハビリテーションについて学ぶ
8	気分（感情）障害①	気分障害とは、うつ病の疫学、うつ病の症状の特徴、うつ病の発症の機制について学ぶ
9	気分（感情）障害②	うつ病の病型をめぐって、躁うつ病の疫学、躁うつ病の症状、躁うつ病の発症の機制、経過及び予後、経過、うつ病・躁うつ病の治療を学ぶ
10	神経症性障害とその特徴	神経症性障害の概念、不安及び恐怖症・恐怖・強迫を中心とする神経症性障害、ストレス関連障害、解離性障害、身体表現性障害について学ぶ
11	精神作用物質による精神および行動の障害	精神作用物質による障害の定義、アルコール関連精神障害、薬物依存による精神障害、治療と回復について学ぶ
12	パーソナリティ障害 精神遅滞	成人のパーソナリティの障害、精神遅滞の概念、疫学、頻度の高い精神遅滞について学ぶ
13	てんかん	定義と概念、疫学、てんかんの発作症状と精神疾患、てんかんにともなう精神障害、経過と予後、てんかんの治療について学ぶ
14	生理的障害および身体的要因に関連した障害	摂食障害（神経性無食欲症・神経性大食症）、睡眠障害について学ぶ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	広範囲に渡る講義であるため復習をその都度行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学（第4版）医学書院
参　考　書	現代臨床精神医学（改訂第１１版）　金原出版
授業の留意点・備考	

科目名	画像診断評価学	担当教員	田代　丈二　/　田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、画像診断学に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・画像診断の定義について学ぶ。 ・ＣＴ画像・ＭＲＩ画像の特性について学ぶ。 ・正常なＣＴ画像・ＭＲＩ画像と重要な部位について学ぶ。 ・異常が認められるＣＴ画像・ＭＲＩ画像とその病巣について学ぶ。
到　達　目　標	・画像診断の定義について説明できる。 ・ＣＴ画像・ＭＲＩ画像の特性について説明できる。 ・正常なＣＴ画像・ＭＲＩ画像と重要な部位について説明できる。 ・異常が認められるＣＴ画像・ＭＲＩ画像とその病巣について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 画像診断の概要と種類	授業の進め方・評価方法などについての説明を受ける。 画像診断の概要と種類について学ぶ。
2	胸部画像：正常像・異常像	胸部X線画像の正常像と異常像について学ぶ。
3	胸部画像：読影演習	胸部X線画像を見て異常とそのメカニズムに気づく。
4	頭部画像	CT画像における正常画像とその特性重要部位について理解する。
5	頭部画像	ＭＲＩ画像における正常画像とその特性・重要部位について理解する。
6	頭部画像	ＣＴ画像とＭＲＩ画像ついての留意点を理解する。
7	頭部画像	脳出血の場合についての要点を理解する。
8	頭部画像	脳梗塞の場合についての要点を理解する。
9	頭部画像	変性疾患の場合についての要点を理解する。
10	頭部画像	脳腫瘍の場合についての要点を理解する。
11	嚥下造影検査1：理論	嚥下造影検査(VF)の解剖学的位置・正常嚥下・異常嚥下について学ぶ。
12	嚥下造影検査2：読影演習	嚥下造影検査(VF)を見て異常とそのメカニズムに気づく。
13	嚥下内視鏡検査：理論	嚥下内視鏡検査(VE)の解剖学的位置・正常嚥下・異常嚥下について学ぶ。
14	嚥下内視鏡検査：読影演習	嚥下内視鏡検査(VE)を見て異常とそのメカニズムに気づく。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	画像診断は病態を知る上で一つの手がかりになるため、臨床では症状と擦りあわせを行う上で参考となる。ここでは正常画像と重要な部位の理解を深め、損傷部位を読影できるようになってもらいたい。事前学習では正常画像をよく見ておくことが重要である。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	ＣＴ・ＭＲＩ画像解剖ポケットアトラス１　頭部・頸部　第４版 メディカル・サイエンス・インターナショナル
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	リハビリテーション医学	担当教員	非常勤講師

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	演習
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医師としてリハビリテーションに携わってきた経験をもとに、リハビリテーション医学とは何か、疾患別のリハビリテーションについての講義を行う。
授業概要	リハビリテーション医学とは何か、成り立ちと今後について、さらに基礎となる学問体系を概説し、リハビリテーションで対象となる疾患に対する診断や治療の進め方を解説する。
到達目標	リハビリテーションの一連の流れ、概略、歴史について説明できる。 疾患別のリハビリテーションを説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	リハビリテーション医学とは何か	リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
2	リハビリテーション医学とは何か	リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
3	リハビリテーション医学とは何か	リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
4	リハビリテーション医学とは何か	リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
5	脳卒中のリハビリテーション	疾患についての理解、病期別のリハビリテーション、具体的なアプローチ
6	パーキンソン症候群のリハビリテーション	パーキンソン病とは、臨床症状、障害評価、治療とリハビリテーション
7	神経変性疾患、神経筋疾患のリハビリテーション	疾患についての理解、一般的治療と薬物療法、リハビリテーション治療の概要
8	脊髄損傷のリハビリテーション	脊髄損傷の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
9	四肢切断のリハビリテーション	四肢切断の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
10	運動器疾患のリハビリテーション	運動器疾患の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
11	関節リウマチのリハビリテーション	疾患についての理解、一般的治療の流れ、リハビリテーション治療の要点
12	脳性麻痺のリハビリテーション	脳性麻痺の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
13	心筋梗塞のリハビリテーション	心筋梗塞の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
14	呼吸器疾患のリハビリテーション	呼吸器疾患の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
15	生活習慣病のリハビリテーション	生活習慣病の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書や配布資料をよく読み復習すること。
成績評価	☑ 定期試験 （ 50 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☑ レポート （ 50 %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	標準リハビリテーション医学　第4版
参考書	適宜資料を配布
授業の留意点・備考	特記なし

科目名	耳鼻咽喉科学	担当教員	篠原　麻代 熊本大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	耳鼻咽喉科医としての経験をもとに、実臨床の現場に基づいた講義を行う。 耳鼻咽喉科専属言語聴覚士としての経験をもとに、実臨床の現場に基づいた講義を行う。
授　業　概　要	言語聴覚士を目指すうえで必要とされる耳鼻咽喉科領域の解剖、生理、疾患についての学習を行う。
到　達　目　標	1) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖・診断・ 検査について系統的に学習する。 2) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の疾患についての治療方法について学習する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	耳鼻咽喉科総論	耳鼻咽喉科領域の疾患を学ぶ上での導入
2	鼻の解剖と生理	鼻の構造と生理的機能を学ぶ
3	鼻の疾患	鼻の疾患を学ぶ
4	口腔咽頭の解剖と生理	口腔咽頭領域の解剖と機能に関して
5	口腔咽頭の疾患	口腔咽頭領域の疾患と治療に関して
6	喉頭の疾患	喉頭の解剖と疾患、治療を学ぶ
7	気管食道の解剖生理、疾患	気管食道の解剖生理、疾患を学ぶ
8	耳の解剖と生理	耳の解剖と生理を学ぶ。
9	耳の検査	聴力検査の種類と方法を学ぶ。
10	耳の疾患①	耳の各疾患の特徴を学ぶ。
11	耳の疾患②	耳の各疾患の特徴を学ぶ。
12	補聴器と人工内耳	補聴器、人工内耳の特徴を学ぶ。
13	喉頭の解剖と生理	喉頭の解剖と生理を学ぶ。
14	摂食・嚥下障害の病態と評価	摂食・嚥下障害の病態と評価法を学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	病気がみえる耳鼻咽喉科（医学情報科学研究所）
参　考　書	New Simple Step 耳鼻咽喉科
授業の留意点・備考	ヒトが社会生活を営む上で必要な機能は、頭頸部に集中しており生活の質(QOL)の維持向上に必須である。頭頸部の機能外科として、耳鼻咽喉科は今後ますます重要性を増してくる領域である。積極的に講義に参加し、予習・復習を行ってほしい。

科目名	形成外科学	担当教員	小薗　喜久夫

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	形成外科診療に携わってきた経験を活かし、言語聴覚療法の今後の臨床に有用な講義を行うことが期待できる。
授　業　概　要	数多くの臨床症例を提示しながら、形成外科で取り扱う主要な疾患の病態と治療法を学習する。
到　達　目　標	形成外科学の概要を学び、言語治療の臨床実践に有益な知識獲得を目ざす。特に口蓋裂に伴う言語治療の基本的治療理論を理解する。

回	テーマ	授　業　内　容
1	形成外科学総論	形成外科学総論、基本的手術、創傷治療の病態
2	形成外科学各論1	先天異常、外傷、皮膚腫瘍、美容の病態と治療
3	形成外科学各論2	唇裂、口蓋裂の病態と形成外科的治療
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義内容を復習する
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	
参　考　書	標準形成外科学　第7版：医学書院
授業の留意点・備考	不明な点は積極的に質問すること

科目名	形成外科学	担当教員	大弓　和政

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	再建手術や各種形成術・外科的矯正など、形成外科的要素を含む口腔外科手術は少なくない。 その様な手術に携わった経験を活かし、形成外科学について講義・演習を行う。
授　業　概　要	形成外科学について講義・演習を行うことで、言語聴覚士として必要な形成外科的知識の習得を目指す。
到　達　目　標	形成外科的アプローチが必要な疾患の特徴とその治療法を理解し、機能障害に対する言語聴覚士のアプローチにまで学習・理解を派生させる。

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション・形成外科学総論	形成外科学の総論について学ぶ。
2	形成外科基本手技	形成外科の基本手技（切開・縫合など）について学ぶ。
3	形成再建外科総論	形成再建外科の概略を学ぶ。
4	形成再建外科各論	植皮や皮弁、硬組織を用いた再建手術など各論を学ぶ
5	皮膚良性腫瘍の手術	形成外科的な良性腫瘍の手術手技について学ぶ。
6	中間小テスト	第1～5回の講義内容を理解し、知識をアウトプットできる。
7	皮膚悪性腫瘍の手術	形成外科的な悪性腫瘍の手術手技について学ぶ。
8	頭頸部疾患の手術	形成外科的な頭頸部疾患（先天性疾患、腫瘍性疾患）の手術手技について学ぶ。
9	口唇裂・口蓋裂　①	口唇裂・口蓋裂の概論を学ぶ。
10	口唇裂・口蓋裂　②	口唇裂・口蓋裂の経過、長期治療計画とその予後について学ぶ。
11	その他の疾患に対する形成外科的治療	その他の疾患に対する形成外科的治療について学ぶ。
12	総括	これまでに学習した内容を復習し、理解を深める。
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおいてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	講師が資料を準備
参　考　書	標準形成外科学　第8版　医学書院
授業の留意点・備考	授業中に分からないことや疑問に思ったことがあれば遠慮なく質問して頂いて構いません。 ※シラバスの内容は一部変更される場合がありますのでご了承ください。 定期試験で及第点に達さなかった場合は、レポート課題をもって再試験と代えさせて頂きます。

科目名	小児科学	担当教員	岩谷　典学

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	小児科医としての臨床・教育・研究の経験および行政での公衆衛生医師としての経験を活かして、小児の医療、関連する保健福祉の制度等について講義を行うことができる。
授　業　概　要	小児の特徴は常に成長・発達していることである。出生から思春期にいたるまでの各時期の身体的特徴や機能の特徴、各身体領域の主な疾患、重要な疾患について、また疾患と障害との関連性について講義を行う。
到　達　目　標	小児科学について学習することによりリハビリテーションに対する幅広い視野をもち、小児リハビリテーションに活かすことができるよう小児科学の基礎的な知識を習得する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	小児の成長と発達1	小児の各時期の身体発育、栄養などの特徴や特殊性とその評価法、主要な病態生理について学ぶ
2	小児の成長と発達2	小児の各時期の運動機能の発達や精神発達、循環器、呼吸器などの生理的機能の発達の特徴とその評価法、主要な病態生理について学ぶ
3	症候の病態生理、診断と治療	小児によくみられる症候の病態生理、診断、治療、事故・応急処置について学ぶ
4	小児保健	小児保健に関する統計、社会的資源、母子保健、予防接種、学校保健、児童虐待などについて学ぶ
5	新生児・未熟児と疾患	主な周産期異常、低出生体重児、新生児仮死、新生児の呼吸障害、中枢神経障害等の病態生理、その評価法、治療などについて学ぶ
6	先天異常と遺伝病	遺伝子・染色体異常、先天代謝異常症、母子感染症などの主な疾患、病態生理について学ぶ
7	神経・筋疾患、骨系統疾患1	主な神経疾患、けいれん性疾患、発達障がい、運動器疾患、骨系統疾患などについて学ぶ
8	神経・筋疾患、骨系統疾患2	主な神経疾患、けいれん性疾患、発達障がい、運動器疾患、骨系統疾患などについて学ぶ
9	循環器、腎・泌尿器系疾患	小児の循環器、腎機能の生理的な特徴、主な疾患、病態生理について学ぶ
10	内分泌・代謝疾患	小児の内分泌・代謝の生理的な特徴、主な疾患、病態生理について学ぶ
11	消化器疾患、血液疾患、腫瘍性疾患	主な消化器疾患、血液疾患、腫瘍性疾患について学ぶ
12	感染症総論・各論	小児の感染症について概説し、主な感染症、重要な感染症について学ぶ
13	免疫・アレルギー疾患、自己免疫疾患	免疫システムのメカニズムについて概説し、主なアレルギー疾患、自己免疫疾患について学ぶ
14	重症心身障害、医療的ケア児、その他	重症心身障がい児、医療的ケア児の特徴や現状、身体管理、その他の小児疾患などについて学ぶ
15	定期試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書および配布資料を基に学習すること
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　小児科学　第6版（医学書院）
参　考　書	特になし。
授業の留意点・備考	担当教員により授業計画は前後する。

科目名	臨床歯科学（口腔外科学）	担当教員	原田　紘

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床歯科医学1							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	歯科・口腔外科の実臨床及び研究に携わった経験を活かし、言語聴覚士に必要とされる歯科医学・口腔外科学について講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	口腔・顎顔面領域の構造・機能、及び各種疾患の病態・治療法について講義・演習を行うことで、言語聴覚士として必要な歯科・口腔外科学の知識習得を目指す。
到　達　目　標	各種病態（先天性疾患・感染性疾患。組織病変）及び外科的処置を理解し、各疾患についての特徴・機能障害が説明できる。また、病態による機能障害が、外科的処置によってどのように改善回復出来るか、またどのような術後障害が生じ得るのかについて説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション・歯学総論	歯学の歴史を認識し、歯牙の発生と構造、口腔機能について理解する。
2	臨床歯科医学①	歯科疾患とその治療（保存修復・歯内療法）について理解する。
3	臨床歯科医学②	歯科疾患とその治療（歯周治療・欠損補綴）について理解する。
4	顎顔面の形態異常・先天性疾患	顎顔面形態異常・先天性疾患の特徴・治療法について理解する。
5	顎顔面外傷・炎症	顎顔面領域の外傷と炎症性疾患の特徴・治療法について理解する。
6	口腔粘膜疾患	口腔粘膜疾患の種類・各特徴について理解する。
7	口腔・顎顔面領域の嚢胞	口腔顎顔面領域の嚢胞の特徴・治療法について理解する。
8	中間テスト	第1～7回の講義内容を理解し、知識をアウトプットできる。
9	腫瘍性病変	口腔顎顔面領域の腫瘍の特徴・治療法について理解する。
10	顎関節疾患・唾液腺疾患	顎関節疾患・唾液腺疾患の特徴・治療法について理解する。
11	神経疾患・口腔機能障害①	顎顔面領域における神経疾患の特徴・治療法について理解する。
12	口腔機能障害②	口腔機能障害の概略・治療・評価法について理解する。
13	口腔外科の治療法	口腔外科手術、悪性腫瘍への各種治療法について理解する。
14	口腔ケア・救急蘇生	口腔ケアの役割と重要性、救急蘇生法について理解する。
15	総括	これまでに学習した内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおくこと。（授業は医学書院の教科書をメインに進めます。医歯薬出版の教科書は参考書として使用することがあるので授業には持参しておいてください。）
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための基礎知識 臨床歯科医学・口腔外科学　第2版：医学書院 言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 器質性構音障害　第版：医歯薬出版
参　考　書	
授業の留意点・備考	授業中に分からないことや疑問に思ったことがあれば遠慮なく質問して頂いて構いません。 可能な限り皆のペースに合わせて講義を進めようと思います。

科目名	脳神経外科学/神経系の構造・機能・病態	担当教員	斎藤　義樹

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	脳神経疾患の治療や研究に携わった経験を講義に活用する。
授　業　概　要	神経解剖や脳神経疾患について基本的な知識を概説する。
到　達　目　標	リハビリテーションにおける脳神経外科学の重要性を理解し実臨床に活用できるようにする。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	神経系の解剖１	中枢神経、末梢神経、脳血管、脳脊髄液、等
2	神経系の解剖２	錐体路、錐体外路、知覚伝導路、等
3	脳血管障害１	脳出血、くも膜下出血、等
4	脳血管障害２	脳梗塞、一過性脳虚血発作、等
5	頭部外傷	急性王幕外血腫、急性硬膜下血腫、脳挫傷、等
6	脳腫瘍	脳実質内腫瘍、脳実質外腫瘍、神経皮膚症候群、等
7	脊髄・脊椎疾患	脊髄空洞症、脊髄腫瘍、脊髄半切症候群、等
8	機能的脳神経外科	片側顔面けいれん、三叉神経痛、不随意運動、等
9	先天異常	二分頭蓋、二分脊椎、等
10	中枢神経系の感染症	髄膜炎、脳炎、脳膿瘍、等
11	障害部位と神経症状１	錐体路障害、錐体外路障害、等
12	障害部位と神経症状２	頭蓋内圧亢進、脳ヘルニア、等
13	障害部位と神経症状３	意識障害、高次脳機能障害、等
14	まとめ１	問題を解説しながら疾患の理解を深める
15	まとめ２	問題を解説しながら疾患の理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおく。講義ノートを復習する。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　神経内科学　第5版：医学書院
参　考　書	病気がみえる vol.7 脳・神経：メディックメディア
授業の留意点・備考	私語を慎み周囲の人に迷惑をかけない。

科目名	呼吸発声発語系の構造・機能・病態	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	音声・言語・聴覚医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期病院で勤務した経験を活かして、言語聴覚士が対象とする疾患に関わる解剖学をもとに支配神経や各部位の運動について講義・演習を行うことができる。
授業概要	発声発語器官の体表解剖学的な知識を身に付けて、より具体的に発声のメカニズムを学習する。
到達目標	正常な発声時の発声発語器官の動きを説明できる。声帯から口唇に至る発声発語器官の動きを一連の流れとして説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	喉頭の解剖・生理①	座学を中心に模型や図を使用し、喉頭周囲の生理・解剖について学ぶ。
2	喉頭の解剖・生理②	生理・解剖をもとに触診を行う。 （舌骨・甲状軟骨・輪状軟骨等）
3	呼吸器系の解剖・生理①	座学を中心に模型や図を使用し、呼吸器系の生理・解剖について学ぶ。
4	呼吸器系の解剖・生理②	スパイロメトリーを用いて呼吸機能の評価を実施する。 呼吸機能低下をもたらす病態について理解する。
5	呼吸器系の評価・病態③	生理・解剖をもとに触診を行う。 （胸郭・胸部聴診・横隔膜等）
6	復習	中間テストに向けて①１～５コマの復習を行う。
7	中間テスト	前半の内容を総復習する。
8	顔面・下顎・舌の解剖・生理①	顔面・舌・下顎における解剖生理を中心に学ぶ。
9	下顎・顔面筋の触診	下顎・表情筋を中心に触診を行う。
10	咽頭と軟口蓋の生理	発声時の軟口蓋の働きについて学ぶ
11	発声発語系における国家試験問題	発声発語系における国家試験問題についてグループデスカッションにて 実際に問題を解いてみる。
12	発声発語系における国家試験問題	発声発語系における国家試験問題についてグループデスカッションにて 実際に問題を解いてみる。
13	肩甲骨等の解剖と触診	姿勢調整等を行うにあたって必要な部位の触診を行う。
14	ポジショニング等の演習	解剖や生理学の視点からポジショニングにおける発声発語器官の筋緊張 の変化について学ぶ
15	定期試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	筋の位置関係や支配神経など臨床で用いる事の多い又は、国家試験に出やすい筋を教科書の図等を用いて予習すると理解しやすいと思います。
成績評価	☑ 定期試験（ 60 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	ディサースリアの基礎と臨床　第１巻　理論編　※主に発声発語器官の解剖・生理
参考書	解剖学関連のテキスト全般　※主に発声発語器官の解剖・生理
授業の留意点・備考	解剖生理に基づいて、触診を実施します。触診の回では、Tシャツなどの軽装で実施予定。基本的に機能回復訓練室で実施します。※触診時は、事前に連絡します。

科目名	聴覚系の構造・機能・病態	担当教員	篠原　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音声・言語・聴覚医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚系の構造や機能、各構造に起こる疾患について専門的に指導を行うことが出来る。
授　業　概　要	聴覚系の基本的な構造と各々の機能を理解し、聴覚に関連する用語とともに学ぶ。
到　達　目　標	聴覚系の基本的な構造とその機能、各部疾患を説明出来る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	スケッチを通して耳の構造を学ぶ。
2	耳の解剖①	外耳、中耳の解剖とその働きを学ぶ。
3	耳の解剖②	内耳の解剖とその働きを学ぶ。
4	聴覚伝導路	音の伝わりの流れを学ぶ。
5	聴覚生理	中耳伝音系、内耳感音系、聴皮質について学ぶ。
6	聴覚検査と鑑別①	純音聴力検査を学ぶ。
7	聴覚検査と鑑別②	自記ｵｰｼﾞｵﾒﾄﾘ、ABR、ｲﾝﾋﾟｰﾀﾞﾝｽｵｰｼﾞｵﾒﾄﾘを学ぶ。
8	聴覚検査体験	検査機器に触れる。
9	外耳の疾患	外耳特有の疾患を理解する。
10	中耳の疾患①	中耳特有の疾患を理解する。
11	中耳の疾患②	中耳特有の疾患を理解する。
12	内耳の疾患①	内耳特有の疾患を理解する。
13	内耳の疾患②	内耳特有の疾患を理解する。
14	後迷路性難聴 機能性難聴	後迷路、機能性難聴について学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業の最後に次コマの内容の説明を行うので、各自予習をして講義に臨むこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	病気がみえる耳鼻咽喉科（医学情報科学研究所）
参　考　書	New Simple Step 耳鼻咽喉科
授業の留意点・備考	聴覚の基盤となる講義です。毎回の復習をしっかり行うこと。

科目名	心理学	担当教員	髙森　敦子

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	15	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	教育、福祉、医療現場における臨床心理士としての経験と知見を活かして講義を実施する。
授　業　概　要	心理学の言葉は私たちの生活の中に何気なく存在し、使われている。しかし、その本来の意味を知ることで、人間のとらえ方、理解は驚くほど深まる。本講義では、自分という人間が持っている、様々な生きていくうえで欠かせない仕組みを、心理学の視点で説明していく。
到　達　目　標	各回のテーマが自分の中で起きている現象を説明してくれる体験を重ねる。今この瞬間、自分の内側や外側で何が起きているのか気づけるようになることで、対人援助職に欠かせない、自他を客観的にとらえる力を養う。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	・オリエンテーション ・外界をとらえる知覚のしくみ	オリエンテーションと「見る・知る」行為の不思議について知る。
2	認知プロセス	考えるとはどういうことか。
3	感情と情緒	感情のしくみや目的を知り、自分に何が起きているか気づく。
4	生理的欲求	生きるための欲求について知る。
5	心理的欲求	生きる意味について考える。
6	学習	「勉強」とは違う「学習」という営みについて知る。
7	記憶	記憶が「私」をつくる？記憶のしくみや種類について知る。
8	性格	性格とは何のことか。どうやってとらえるのか。
9	無意識と臨床心理	無意識とは何か。自分を守る心のしくみについて知る。
10	発達と成長	人の発達をライフステージに分けてとらえる。
11	対人と社会の心理	人が社会の中で生きるときに、関係性の中で何を思いどう行動するのか。
12	心理テスト　実習	自分の性格を知るための検査を体験する。
13	心理テスト　解釈	検査の解釈を通して自分自身の理解を深める。
14	ストレスへの対処と健康	自分のストレスについて傾向を知り対策をたてる。
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業中にレポート記述します。返却後自分が書いたものを読み直しましょう。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 30 %）☑ 実技試験　（ 10 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 60 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	齋藤勇　著「イラストレート心理学入門・第３版」誠信書房
参　考　書	より深く学びたい人向けに、授業で適宜紹介します。
授業の留意点・備考	授業では、教科書を精読しますので忘れないようにしてください。また、重要な語句や説明を記入してワークシートを完成させます。記入漏れや語句の誤りに注意してください。

科目名	心理測定法	担当教員	田代丈二・田添琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床での研究経験など通じ、その知見を活かして講義を行う。
授業概要	言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。
到達目標	言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	授業の進め方について／心理学的測定法とは何を測定するのか
2	心理物理学的測定法	心理測定における尺度水準と測定における誤差について学ぶ。
3	心理物理学的測定法	心理測定における尺度水準とその検定方法（パラメトリック・ノンパラメトリック）について学ぶ。
4	心理物理学的測定法	心理物理学的測定法の詳細について学ぶ。（調整法、極限法、恒常法）
5	心理物理学的測定法	心理物理学的測定法の詳細について学ぶ。（上下法、適応法、マグニチュード推定法、信号検出理論）
6	テスト理論	心理検査における理論や信頼性・妥当性について学ぶ。
7	尺度構成法	尺度構成を学習したうえで自ら尺度構成を作成し体験する
8	調査法	調査法の概要や標本化抽出・母集団についての理解を深める。
9	データ解析法	統計学（仮説統計を中心に）学び、多変量解析について併せて理解する。
10	実践	言語聴覚士国家試験を用いて問題を解き、解説を行う。
11	実践	言語聴覚士国家試験を用いて問題を解き、解説を行う。
12	実践	言語聴覚士国家試験を用いて問題を解き、解説を行う。
13	実践	言語聴覚士国家試験を用いて問題を解き、解説を行う。
14	実践	言語聴覚士国家試験を用いて問題を解き、解説を行う。
15	まとめ	テストを行い学習の総括を行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	特になし
成績評価	☑ 定期試験（ 90 %）☐ 実技試験（ %）☐ 小テスト（ %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☑ その他（出席点10% ）
教科書	言語聴覚士のための心理学 第２版　山田弘幸編集　医歯薬出版株式会社
参考書	心理学　第５版　鹿取廣人　杉本敏夫　鳥居修晃編　東京大学出版社 キーワードコレクション　心理学改訂版　重野純編　新曜社
授業の留意点・備考	内容が複雑であるため、１コマ１コマの復習を忘れずに行って下さい。

科目名	発達心理学	担当教員	髙野　浩美

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所やこども総合療育センター等でこどもの相談業務に携わった経験を活かし、こどもの発達を中心に講義を行う。
授　業　概　要	発達心理学は生涯にわたった発達ではあるが、特にこどもの発達を中心に言葉の土台になる認知、愛着、対人関係、自己の発達、社会性、遊び等の発達について学習する。
到　達　目　標	言語療法士として、言葉の発達相談、指導を行う時、言葉の視点からだけでなく、理解や遊びや対人関係など総合的で発達的な視点から子どもをとらえ、説明できる力をつける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	発達心理学とは	発達とは獲得と喪失のプロセスで胎児期から死ぬまで　第1・3章2
2	遺伝と環境	発達には段階や課題があり、遺伝と環境の相互作用で発達する　第2・3章3.4.5
3	胎児期・周産期	出生前後の発達や母親の身体的・心理的問題の理解　第4章
4	乳児期（感覚の発達）	乳児期の感覚や研究方法を理解　第5章1.2.3
5	乳児期（運動の発達）	乳児期の運動の発達の特徴の理解　第5章4
6	愛着の発達①	愛着の発達段階や個人差を理解　第6章1.2.3
7	愛着の発達②	愛着発達不全の理解　第6章4.5
8	自己と感情の発達	感情の発達が自己意識と関係があること　第7章
9	認知の発達①	乳児期の認知の特徴　ピアジェ　第8章1.2.3
10	認知の発達②	幼児期の認知の特徴　第8章4.5
11	社会性、道徳性の発達	共同注意や心の理論等社会性の発達の特徴　第10章
12	遊び、仲間関係	遊びや仲間関係の発達の特徴　第11章
13	学童期・青年期	学童期の認知・社会性の理解　第15章1.2.3 青年期の特徴・アイデンティティの理解　第15章4.5.6
14	成人期～老年期	成人期～老年期の特徴　第16章
15	テスト	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	「教科書を読んでおく」「講義ノートを復習する」
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	よくわかる発達心理学：ミネルヴァ書房
参　考　書	言語聴覚士のための心理学：医歯薬出版　問いからはじめる発達心理学：有斐閣
授業の留意点・備考	講義に関するテーマで２回レポートを提出し、講義内容を深める。

科目名	学習・認知心理学	担当教員	髙森　敦子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	2	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容								選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床心理士としての経験と知見を活かして講義を実施する。
授　業　概　要	本講義では、学習心理学、認知心理学の諸分野について学ぶ。「感覚」「知覚・認知」「学習」「記憶」「思考」が言語聴覚士の行うアセスメントや支援のベースに欠かせないことを理解する。用語になじみ、専門的に考えるための基礎力を養う。
到　達　目　標	以下の4つの問いに対して、心理学の用語と具体例を用いてわかりやすく説明できる。1，生体はどのようにして外の世界や自己についての情報を受け取るか？（感覚）2，入力された感覚情報から、どのようにして主観的な世界が構成されるのか？（知覚・認知）3，生体はどのようにして新しい知識や行動を獲得するか？（学習）4，記憶はどのように形成され、保持され、思い出されるのか？（記憶）

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーションと第1講「感覚」	心理学の歴史、感覚、知覚、認知について
2	視覚	ものを見る仕組みについて
3	形の知覚と色の知覚	形や色を認識する仕組みについて
4	形の知覚と色の知覚	形や色を認識する仕組みについて、練習問題
5	奥行きの知覚と動きの知覚	距離や動きをどうやって把握しているのか
6	奥行きの知覚と動きの知覚	距離や動きをどうやって把握しているのか、練習問題
7	その他の感覚と錯覚・注意	視覚以外の感覚とその処理について
8	その他の感覚と錯覚・注意	錯覚のしくみ、注意とワーキングメモリー
9	記憶と忘却・知識	記憶の過程と分類、忘却の分類
10	記憶と忘却・知識	知識、練習問題
11	推論と問題解決	考えるとはどういうことか、問題解決の方略
12	古典的条件付け・オペラント条件付け	「学習」の基礎
13	さまざまな学習	条件付けの展開、技能学習、社会的学習
14	練習問題と解説	これまでの学習をもとに問題を解く
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業で取り組む練習問題を復習しましょう。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☑ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	適宜資料を配布する。
参　考　書	授業でそのつど紹介する。
授業の留意点・備考	授業では、重要な語句を記入しながら配布資料を完成させます。記入漏れをしたり、誤った語句を書かないよう、注意してください。

科目名	言語学	担当教員	増田　正彦

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	言語学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	九州大学大学院人文科学研究院　言語運用総合研究センターにて専門研究員として従事
授　業　概　要	この授業では、言語聴覚士として必要な、言語に関する知識を学ぶ。
到　達　目　標	・言語聴覚士として必要な言語の知識について説明できる。 ・言語聴覚士として必要な言語の知識を用いて、言語表現の分析ができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	授業の進め方、評価
2	人間言語の特徴	恣意性、二重分節性
3	音韻論1	音素と異音
4	音韻論2	ミニマルペア
5	音韻論3	相補分布
6	音韻論4	日本語の音素体系
7	形態論1	形態素と異形態
8	形態論2	形態素の分類
9	形態論3	動詞の活用
10	形態論4	語形成
11	統語論1	日本語文の基本的な構成
12	統語論2	日本語の格
13	統語論3	ヴォイス
14	統語論4	テンス・アスペクト
15	統語論5	モダリティ・複文

授　業　計　画		
回	テーマ	授　業　内　容
16	前半のまとめ	音韻論、形態論、統語論について復習を行う
17	意味論1	類義語、対義語
18	意味論2	上位語、下位語
19	意味論3	プロトタイプ、基本レベル
20	意味論4	比喩
21	誤用論1	含意・前提
22	誤用論2	会話の含意
23	誤用論3	発話行為
24	文字論1	文字の類型
25	文字論2	仮名文字
26	文字論3	漢字
27	社会言語学1	話者の属性による変異
28	社会言語学2	使用場面による変異
29	類型論	類型論的視点から日本語について学ぶ
30	まとめ	全体の総括

準備学習（予習復習）の具体的な内容	数回に1回小テストを行うので、講義のプリントを中心に復習をよく行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 70 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 30 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学　第2版
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	

科目名	音声学	担当教員	増田　正彦

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音声学							選択・必修	必修
担当教員の実務経験	九州大学大学院人文科学研究院　言語運用総合研究センターにて専門研究員として従事										
授　業　概　要	この授業では、言語の媒体である音声の調音的側面を中心に学んでいく。前半では、子音や母音の仕組みを学びつつ、それらを国際音声記号でどう表せばよいかを習得する。後半はプロソディー、つまり音節・アクセント・イントネーションなどについて学ぶ。										
到　達　目　標	日本語共通語に現れる音声を国際音声記号で表記し、その意味を説明できる。調音位置、調音方法、声門の状態などの点から子音を分析できる。舌の前後、高さ、円唇性などの点から母音を分析できる。日本語の韻律について説明できる。										

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション①	音声の種類、音声に関わる諸学問について学ぶ
2	オリエンテーション②	音声の種類、音声に関わる諸学問について学ぶ
3	子音の基本①-1	子音の分類方法（調音位置、調音方法、声帯振動の有無）について学ぶ
4	子音の基本①-2	子音の分類方法（調音位置、調音方法、声帯振動の有無）について学ぶ
5	子音の基本②-1	主に日本語共通語を例として、破裂音について学ぶ
6	子音の基本②-2	主に日本語共通語を例として、破裂音について学ぶ
7	子音の基本③-1	主に日本語共通語を例として、摩擦音について学ぶ
8	子音の基本③-2	主に日本語共通語を例として、摩擦音について学ぶ
9	子音の基本④-1	主に日本語共通語を例として、破擦音について学ぶ
10	子音の基本④-2	主に日本語共通語を例として、破擦音について学ぶ
11	子音の基本⑤-1	主に日本語共通語を例として、鼻音・接近音などについて学ぶ
12	子音の基本⑤-2	主に日本語共通語を例として、鼻音・接近音などについて学ぶ
13	子音の二次的調音①	通常の分類方法だけでは分析できない子音について学ぶ
14	子音の二次的調音②	通常の分類方法だけでは分析できない子音について学ぶ
15	子音の交替①	前後の環境に応じて子音が交替する現象について学ぶ

授　業　計　画		
回	テーマ	授　業　内　容
16	子音の交替②	前後の環境に応じて子音が交替する現象について学ぶ
17	母音①	母音の分類方法、第1次基本母音について学ぶ
18	母音②	母音の分類方法、第1次基本母音について学ぶ
19	母音の交替①	前後の環境に応じて母音が交替する現象について学ぶ
20	母音の交替②	前後の環境に応じて母音が交替する現象について学ぶ
21	音のまとまり①	モーラ・音節など、音のまとまりについて学ぶ
22	音のまとまり②	モーラ・音節など、音のまとまりについて学ぶ
23	アクセント①-1	音の高低の聞き取り、共通語のアクセントの語例について考える。
24	アクセント①-2	音の高低の聞き取り、共通語のアクセントの語例について考える。
25	アクセント②-1	共通語アクセントのパターンについて学ぶ
26	アクセント②-2	共通語アクセントのパターンについて学ぶ
27	アクセント③-1	語の種類（品詞など）によってアクセントがどう変わるかを学ぶ
28	アクセント③-2	語の種類（品詞など）によってアクセントがどう変わるかを学ぶ
29	イントネーション	文末イントネーション、ダウンステップ、自然下降などについて学ぶ
30	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	数回に1回小テストを行うので、講義のプリントを中心に復習をよく行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 70 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 30 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学　第2版
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	

科目名	音響学	担当教員	藤井　忍

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音響学							選択・必修	必修
担当教員の実務経験	音の性質の基本原理から音声音響に至るまでの全内容について、音響技術と教育との実務経験に基づいた具体の講義ができる。										
授　業　概　要	音声を「音」として認識し、音の性質などの基礎知識と照合して、その物理的関連性を学習する。										
到　達　目　標	音の基本的性質を理解して、物理的特性の説明ができる。また、サウンドスペクトログラムの読み取りや音声の音響的特徴の説明ができる。										

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	はじめに／音とは何かを考える。	身近な音を考える。発生や伝搬メカニズム（縦波と横波など）を学ぶ。
2	音の物理的側面	純音、波長、周波数、周期の関係を知り、音の基本的性質について学ぶ。
3	音の強さ１	音の強さと音圧の関係、音圧レベル変換方法などを学ぶ。
4	音の強さ２	デシベル（対数）、音圧レベルの位置づけ等の詳細について学ぶ。
5	スペクトル	周波数分析、音の種類などについて学ぶ。
6	共鳴・共振	音の共鳴と母音の音響特性について学ぶ。
7	音声生成の音響理論	ソース・フィルタ理論について学ぶ。
8	言語音の生成と知覚１	母音と母音に準ずる音の音響特性について学ぶ。
9	言語音の生成と知覚２	子音の音響特性について学ぶ。
10	音声音響学１	サウンドスペクトログラフの読取り方を学び、視覚的判断に慣れる。
11	音声音響学２	サウンドスペクトログラフの読取り演習（グループワーク）１
12	音声音響学３	サウンドスペクトログラフの読取り演習（グループワーク）２
13	音声音響学４	韻律、特殊拍、子音の音響的特徴の補足について学ぶ。
14	サンプリング・国試解説など	音声のデジタル化（標本化・量子化）などについて学ぶ。
15	試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	予めテキストを読み、理解できなくてもよいので配布した資料を下見して授業に望む。 復習よりも予習（何だろうで可）に時間をかけた方が効果的である。
成　績　評　価	☑ 定期試験（ 70 %）☐ 実技試験（ %）☐ 小テスト（ %）☑ レポート（ 30 %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教　科　書	竹田京子・稲田朋晃編集　「音響・音声学」　メジカルビュー社
参　考　書	今泉　敏著　「言語聴覚士のための音響学」　医歯薬出版
授業の留意点・備考	テキストでは得られない内容を資料として配布します。併せてビデオや説明図を使った補足を行います。文系の方に配慮した覚え方を取り入れており、学習チェックでいつでも質問ができますので気軽な声かけをお願いします。レポートはグループ活動とし、態度や意欲などの積極性も採点の対象となります。

科目名	聴覚心理学	担当教員	中島　栄俊

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音響学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	音声信号処理による音声の視覚化や聴覚障害、構音障害の補償等の研究経験を活かし、音声特有の特徴や現象について講義することができる。
授　業　概　要	耳から入る「音の物理的特性」と、それが引き起こす「人間の感覚」との関係を明らかにすることで、言語・聴覚系の専門職である言語聴覚士として接する「人」の音に対する感覚について理解する。
到　達　目　標	聴覚抹消系の基本的なメカニズムを理解し、音信号の情報が脳に伝達されるまでの過程を説明することができる。音の物理的特性に対する、大きさ、高さの感覚の変化を説明することができる。マスキングの概念と、音信号の周波数知覚（周波数選択生）の関係を説明することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	聴覚抹消系の構造 1	外耳と中耳の仕組みと、それによって変化する音の特徴について学ぶ
2	聴覚抹消系の構造 2	内耳の生理学的構造と、音信号が神経信号に変換される仕組みについて学ぶ
3	聴覚抹消系の構造 3	音信号の物理的変化に対する聴神経の応答について学ぶ
4	音の大きさの知覚 1	刺激の変化に対する感覚の変化のモデルについて学ぶ
5	音の大きさの知覚 2	音の大きさに影響する物理的要因や音の大きさを表す尺度について学ぶ
6	音の大きさの知覚 3	聴覚障害特有の音の大きさの知覚について学ぶ
7	音の高さの知覚 1	音の高さに影響する物理的要因や音の高さを表す尺度について学ぶ
8	音の高さの知覚 2	聴覚抹消系の構造と音の高さの知覚の関係について学ぶ
9	中間試験	第1回から第8回までに学んだ範囲について理解度を確認する
10	マスキング 1	他の音の存在により音の知覚が困難になる現象であるマスキングについて学ぶ
11	マスキング 2	マスキングが生じる要因を聴覚抹消系の構造から理解する
12	両耳聴効果 1	左右の耳で音を聞くことによる効果について学ぶ
13	両耳聴効果 2	左右の耳で音を聞くことによる効果や視覚が音知覚に与える影響について学ぶ
14	音声音響学	音声生成の原理と音声周波数の特徴について学ぶ
15	総合演習	14回目までに学習した範囲の復習を行う

準備学習（予習復習）の具体的な内容	テキストを読み、サポートサイトで確認できる実際の音を事前に聞くことで大まかなイメージを掴んでおく
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☑ その他（中間試験　40 %　）
教　科　書	Crosslink言語聴覚療法学テキスト　音響・音声学
参　考　書	平原達也他共著　「日本音響学会編　音響入門シリーズA-3　音と人間」　コロナ社（ISBN978-4-339-01303-0）
授業の留意点・備考	なるべく平易に理解できるテキストを指定していますので、不足する内容については適宜資料を配布します。その他、メールやSNSを利用して情報発信をしますので、気軽に質問してください。

科目名	言語発達学	担当教員	小路　美香

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	言語発達学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童発達支援事業所や医療機関において、相談・指導の業務経験を活かし、子どものことばの発達について具体的な講義を行うことが出来る。
授業概要	乳児期、幼児期、学童期における言語発達過程について学ぶとともに、きこえとことばとの関係や全体発達の中でのことばの位置づけ、ことばの働きなどについて理解することを目的とする。言語発達障害について学ぶ基礎とする。
到達目標	・ことばの働きについて理解する。 ・乳児期、幼児期、学童期における言語発達の特徴を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語発達理論	学習説、生得説、認知説、社会認知説
2	前言語期の発達①	コミュニケーション行動の発達
3	前言語期の発達②	共同注視の発達
4	前言語期の発達③	発声行動・言語音知覚、認知機能の発達
5	１～２歳の言語発達①	初語の出現、語彙の増加
6	１～２歳の言語発達②	言語発達を促す大人の役割
7	１～２歳の言語発達③	象徴機能、構文の発達
8	１～３歳の言語発達③	象徴機能、構文の発達
9	幼児期の言語発達①	語彙、構文の発達
10	幼児期の言語発達②	談話の発達、質問応答関係検査について
11	幼児期の言語発達③	音韻意識の発達
12	学童期①	読み書き能力の発達、STRAW-Rについて
13	検査について	検査の種類
14	学童期③	談話能力の発達
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配付資料を確認の上、事前に読むこと
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他（　　）
教科書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第3版・発声発語障害学　第3版
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	リハビリテーション概論	担当教員	有働　正二郎・岩北　耕三

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	社会福祉・教育							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	１０年以上の臨床経験を活かし、リハビリテーションの概要について指導することが出来る。
授　業　概　要	リハビリテーションの理念と基本原理及びその仕組みについて学習する。病気・障害・発達・心理等の基本的内容について教授する。その後、リハビリテーションの諸段階及びリハビリテーションの過程の概要を学習する。　リハビリテーション概論で学習した内容を基盤として、各専門分野の理解が深まることを目的とする。
到　達　目　標	リハビリテーションの概念理解が出来る。病気・障害・発達の概念理解が出来る。人間活動の階層構造が理解出来る。国際生活機能分類の概略が理解出来る。神経心理学・臨床心理学とその内容について説明出来る。リハビリテーションの過程と諸段階での課題について説明出来る。医学的・教育的・職業的・社会的・高齢者の諸相について説明出来る。リハビリテーションのプロセスと手段について説明出来る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 障害者と社会	理学療法（士）及び作業療法（士）・言語聴覚（士）は法律にどのように規定されているのかを学ぶ　（有働）
2	リハビリテーションの定義と目的	リハビリテーションの言葉の由来や意味について学び、リハビリテーションの目的の変遷や社会制度の変革について学ぶ　（有働）
3	病気とは	病気の捉え方の歴史的変遷を学ぶ　（有働）
4	障害とは	障害のモデル、特に国際障害分類（ＩＣＩＤＨ）・国際生活機能分類（ＩＣＦ）について学ぶ　（有働）
5	患者と障害者 慢性疾患モデル	患者と疾病行動や役割について学び、科学的根拠に基づく医療（ＥＢＭ）やクリニカルパス、二次的障害や予防医学について学ぶ　（有働）
6	機能志向的アプローチ ヘルスケア・システムと包括的ケア	機能志向的アプローチについて学び、ヘルスケアの概要について学ぶ　（有働）
7	発達とは 人間活動	発達の定義を知り、発達研究や発達理論について概要を学ぶ　（有働）
8	リハビリテーションと心理１	心理アセスメントの概要について学ぶ 心理的機能とその障害について（意識・注意・記憶）学ぶ　（有働）
9	リハビリテーションと心理２	心理的機能とその障害について（遂行機能・認知・言語・行為・知能・認知リハ）学ぶ（有働）
10	リハビリテーションと心理３	心理的適応の過程について学ぶ　（有働）
11	リハビリテーションの過程 リハビリテーションの諸段階	評価とはなにか、評価学の重要性を学ぶ　（岩北） 医学的・職業的・社会的・教育的リハビリテーション
12	チームアプローチ	リハ専門職の役割　（岩北）
13	機能障害	疾病と外傷、先天異常及び精神障害　（岩北）
14	地域リハビリテーションと高齢者対策	老人福祉法・老人保健法・介護保険制度　（岩北）
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書のすべてを授業では行えません。講義が終わった項目までは、当日、教科書を読み直し復習を充分に行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	入門　リハビリテーション概論　第7版　　中村隆一　編　　医歯薬出版 リハビリテーション総論　診断と治療社
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	リハビリテーションを学習する上での基本となる科目であることを充分認識しておくこと。

科目名	社会保障制度	担当教員	紫藤千子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	社会福祉・教育							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	県福祉総合相談所（身体障害者更生相談所）勤務中、身体障害者福祉司として従事。福祉行政の経験を活かした講義を構築し、指導することが出来る。
授業概要	わが国の社会保障制度の全体構造を把握すると共にその仕組みを理解する。また、社会保障制度を各制度ごとに、法律・制度概要及びその実施方法などを理解する。
到達目標	・ 社会保障制度全体の法体系を理解する。 ・ 社会保障制度毎にその関係法・内容や仕組みを理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	1．講義の目標と構成・講義での約束 2．社会保障の定義と理念・機能
2	社会保障制度の体系	1．社会保険 2．社会扶助①公的扶助　②社会手当て　③社会福祉
3	社会保障の財源と実施体制	1．財源 2．実施体制
4	年金保険制度	年金保険制度関係各法
5	医療保険制度①	医療保険各法 国民健康保険
6	医療保険制度②	厚生医療保険 その他の医療保険制度
7	社会福祉制度	（1）社会福祉制度の法体系 （2）社会福祉制度の基本的運用制度
8	生活保護制度と社会手当て	生活保護制度
9	児童福祉制度①	（1）児童福祉法の概要 （2）障害児対策
10	児童福祉制度②	（3）子育て支援制度　一人親対策制度
11	障害福祉制度①	（1）法体系と基本的考え方 （2）障害者総合支援法
12	障害福祉制度②	（3）総合支援法以外の障害福祉制度
13	高齢者福祉制度①	（1）法体系 （2）高齢者医療制度
14	高齢者福祉制度②	（3）介護保険制度
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書、配布資料をよく読むこと。
成績評価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	新・社会福祉士養成講座　精神保健福祉士養成講座　社会保障　第６版　中央法規 社会保障制度指さしガイド　２３年度版　日総研
参考書	
授業の留意点・備考	覚えることの多い科目ですが、国家試験を見据え、整理して理解しましょう。

科目名	言語療法基礎Ⅰ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	医学総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
2	基礎医学について②	解剖学について要点を整理し、模擬試験に備える。
3	基礎医学について③	生理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
4	基礎医学について④	病理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
5	臨床医学について①	内科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
6	臨床医学について②	小児科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
7	臨床医学について③	精神医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
8	臨床医学について④	リハビリテーション医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
9	臨床医学について⑤	耳鼻咽喉科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
10	臨床医学について⑥	臨床神経学について要点を整理し、模擬試験に備える。
11	臨床医学について⑦	形成外科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
12	臨床歯科医学について①	臨床歯科医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
13	臨床歯科医学について②	口腔外科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
14	音声・言語・聴覚医学について①	呼吸発声発語系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。
15	音声・言語・聴覚医学について②	聴覚系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	音声・言語・聴覚医学について③	神経系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。
17	心理学①	学習・認知心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
18	心理学②	心理測定法について要点を整理し、模擬試験に備える。
19	心理学③	臨床心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
20	心理学④	生涯発達心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
21	音声・言語学①	音声学について要点を整理し、模擬試験に備える。
22	音声・言語学②	音響学について要点を整理し、模擬試験に備える。
23	音声・言語学③	聴覚心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
24	音声・言語学④	言語学について要点を整理し、模擬試験に備える。
25	音声・言語学⑤	言語発達学について要点を整理し、模擬試験に備える。
26	社会福祉・教育①	社会保障制度について要点を整理し、模擬試験に備える。
27	社会福祉・教育②	リハビリテーション概論について要点を整理し、模擬試験に備える。
28	社会福祉・教育③	医療福祉教育・関係法規について要点を整理し、模擬試験に備える。
29	基礎分野まとめ	1～28回目までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
30	基礎分野模擬試験	1～28回目までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（基礎分野模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法基礎Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害学総論について①	言語聴覚障害学総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
2	言語聴覚障害学総論について②	言語聴覚障害診断学について要点を整理し、模擬試験に備える。
3	失語症について①	失語症の定義について要点を整理し、模擬試験に備える。
4	失語症について②	言語症状と失語症候群について要点を整理し、模擬試験に備える。
5	失語症について③	失語症の評価・診断について要点を整理し、模擬試験に備える。
6	失語症について④	失語症の訓練・援助について要点を整理し、模擬試験に備える。
7	失語症について⑤	後天性小児失語症について要点を整理し、模擬試験に備える。
8	高次脳機能障害について①	神経心理学の基本概念について要点を整理し、模擬試験に備える。
9	高次脳機能障害について②	各種高次脳機能障害の病巣・症状・検査について要点を整理し、模擬試験に備える。
10	高次脳機能障害について③	高次脳機能障害の指導・訓練について要点を整理し、模擬試験に備える。
11	言語発達障害学について①	言語発達障害の総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
12	言語発達障害学について②	言語発達障害の評価について要点を整理し、模擬試験に備える。
13	言語発達障害学について③	言語発達障害の指導、訓練について要点を整理し、模擬試験に備える。
14	発声発語・嚥下障害学について①	音声障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
15	発声発語・嚥下障害学について②	構音障害について要点を整理し、模擬試験に備える。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	発声発語・嚥下障害学について③	嚥下障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
17	発声発語・嚥下障害学について④	吃音について要点を整理し、模擬試験に備える。
18	聴覚障害学①	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
19	聴覚障害学②	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
20	聴覚障害学③	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
21	聴覚障害学④	成人聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
22	聴覚障害学⑤	成人聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
23	聴覚障害学⑥	補聴器・人工内耳について要点を整理し、模擬試験に備える。
24	聴覚障害学⑦	補聴器・人工内耳について要点を整理し、模擬試験に備える。
25	聴覚障害学⑧	視覚聴覚二重障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
26	まとめ①	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
27	まとめ②	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
28	まとめ③	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
29	まとめ④	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
30	専門分野模擬試験	1～25までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（専門分野模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語聴覚障害概論Ⅰ	担当教員	ST学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	各教員が豊かな経験に基づき講義・演習を行う
授　業　概　要	・言語聴覚リハビリテーションに関連する音声、言語、聴覚における障害に触れる。
到　達　目　標	・言語聴覚士法について知る。 ・スピーチチェインを理解する。 ・言語聴覚障害の種類と原因を知る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	言語聴覚障害と言語聴覚士
2	言語聴覚士の業務内容	STの法律的位置、職場、活動、倫理
3	言語聴覚士に必要な基礎知識１	コミュニケーション障害にかかわる解剖1
4	言語聴覚士に必要な基礎知識２	コミュニケーション障害にかかわる解剖2
5	言語聴覚士に必要な基礎知識３	コミュニケーション障害にかかわる生理
6	言語聴覚士に必要な基礎知識４	言語聴覚障害・摂食嚥下障害の概要・分類
7	言語聴覚士に必要な基礎知識５	失語症Ⅰ
8	言語聴覚士に必要な基礎知識６	失語症Ⅱ
9	言語聴覚士に必要な基礎知識７	運動障害性構音障害Ⅰ
10	言語聴覚士に必要な基礎知識８	運動障害性構音障害Ⅱ
11	言語聴覚士に必要な基礎知識９	小児言語発達
12	言語聴覚士に必要な基礎知識１０	器質性・機能性構音障害
13	言語聴覚士に必要な基礎知識１１	聴覚障害Ⅰ(小児)
14	言語聴覚士に必要な基礎知識１２	聴覚障害Ⅱ(補聴器・人工内耳)
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習をしっかり行ってください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	最新言語聴覚学講座　言語聴覚障害学概論
参　考　書	
授業の留意点・備考	聞きなれない専門用語等がたくさんでてきますが、１つ１つしっかり理解しましょう。

科目名	言語聴覚障害概論Ⅱ	担当教員	ST学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	各教員が豊かな経験に基づき講義・演習を行う
授業概要	・三大コミュニケーション障害について理解する。
到達目標	・音声障害の概要について説明できる。 ・認知症によるコミュニケーション障害の概要について・高次脳機能障害の概要について説明できる。 ・言語発達障害の概要について説明できる。 ・摂食嚥下障害の概要について説明できる。 ・聴覚障害の概要について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	高次脳機能障害について１	高次脳機能障害１（注意障害）
2	高次脳機能障害について２	高次脳機能障害２（記憶障害）
3	高次脳機能障害について３	高次脳機能障害３（遂行機能障害）
4	音声障害１	音声障害・無喉頭音声（喉頭の機能・発声の仕組み）
5	音声障害２	音声障害・無喉頭音声障害（障害と代替方法）
6	言語発達障害１	言語発達障害Ⅰ（コミュニケーション障害）
7	言語発達障害２	言語発達障害Ⅱ（自閉症・注意欠如多動性障害）
8	言語発達障害３	言語発達障害（吃音）
9	聴覚障害１	小児聴覚障害
10	聴覚障害２	成人聴覚障害
11	摂食・嚥下について１	摂食・嚥下障害Ⅰ（嚥下に必要な器官・嚥下の仕組み）
12	摂食・嚥下について２	摂食・嚥下障害Ⅱ（嚥下障害を引起す疾患）
13	摂食・嚥下について３	摂食・嚥下障害Ⅲ（嚥下障害の訓練）
14	コミュニケーション実際	実習発表
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習を行ってください。
成績評価	☑ 定期試験（ 70 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 30 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	最新言語聴覚学講座　言語聴覚障害学概論
参考書	適宜紹介します。
授業の留意点・備考	

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅰ（成人分野）	担当教員	ST学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、成人分野における言語聴覚障害診断に関する講義・演習を行うことができる。
授業概要	・言語聴覚障害における診断の流れについて学ぶ。 ・言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について学ぶ。 ・成人分野における言語聴覚障害について学ぶ。 ・失語症・高次脳機能障害・運動性構音障害・嚥下障害等の診断について学ぶ。
到達目標	・言語聴覚障害における診断の流れが説明できる。 ・言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について説明できる。 ・成人分野における言語聴覚障害について説明できる。 ・失語症・高次脳機能障害・運動性構音障害・嚥下障害等の診断について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害診断について１	言語聴覚障害における診断の流れについて学ぶ。
2	言語聴覚障害診断について２	言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について学ぶ。
3	言語聴覚障害について１	失語症について学ぶ。
4	言語聴覚障害について２	高次脳機能障害について学ぶ。
5	言語聴覚障害について３	運動性構音障害について学ぶ。
6	言語聴覚障害について４	嚥下障害について学ぶ。
7	言語聴覚障害について５	上記以外の言語聴覚士が遭遇する言語聴覚障害について学ぶ。
8	言語聴覚障害診断１	失語症の評価・診断について学ぶ。
9	言語聴覚障害診断２	高次脳機能障害の評価・診断について学ぶ。
10	言語聴覚障害診断３	運動性構音障害の評価・診断について学ぶ。
11	言語聴覚障害診断４	嚥下障害の評価・診断について学ぶ。
12	言語聴覚障害診断５	上記以外の言語聴覚士が遭遇する言語聴覚障害の評価・診断について学ぶ。
13	診断実践１	症状から問題点の抽出までを学ぶ。
14	診断実践２	症状から問題点の抽出までを学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	言語聴覚障害の診断は一連の流れを経て確定診断を下すに至る訳だが、症状としては見た目同じであってもその実障害の中身が全く異なっていることも多い。これら紛らわしい障害を鑑別し診断を下すことは、経験を積まなければ難しい。ここでは各障害の特性を、まずはテキストを使って予習してきて貰いたい。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %） ☐ 実技試験 （ %） ☐ 小テスト （ %） ☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %） ☐ 発表 （ %） ☐ その他 （ ）
教科書	言語聴覚療法臨床マニュアル　改訂第３版　協同医書出版社
参考書	
授業の留意点・備考	適宜必要な資料は配布する。

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅱ（小児分野）	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	小児臨床に携わった経験を活かし、小児言語聴覚リハビリテーションにおいて言語聴覚士が携わることの多い小児疾患の特徴と臨床の進め方を指導できる。
授　業　概　要	本授業は、小児の言語障害に対する評価から診断、訓練といった一連の流れについて学習する。 また、症例を通してレポート作成方法を学習する。
到　達　目　標	・情報収集内容を知る。 ・診断の流れを理解する。 ・レポートの作成方法を身につける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	臨床実習の目的・種類・目標について学ぶ。
2	情報収集の項目と方法およびその解釈	臨床を行う上で基礎情報、現症に関する情報の収集について学ぶ。
3	評価・診断の知識①	知的障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
4	評価・診断の知識②	自閉症スペクトラム障害の言語聴覚療法について学ぶ。
5	評価・診断の知識③	学習障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
6	評価・診断の知識④	特異的言語発達障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
7	評価・診断の知識⑤	聴覚障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
8	評価・診断の知識⑥	構音障害、吃音領域の言語聴覚療法について学ぶ。
9	評価・診断の知識⑦	脳性麻痺、重症心身障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
10	評価・診断のまとめ方①	ケースレポートのまとめ方を学ぶ。
11	評価・診断のまとめ方②	ケースレポートのまとめ方を学ぶ。
12	小児評価法①	小児評価法をまとめる。
13	小児評価法②	小児評価法をまとめる。
14	小児訓練法	小児訓練法をまとめる。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書をよく読んでおくこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☑ 課題　（ 80 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための臨床実習テキスト　小児編　建帛社
参　考　書	
授業の留意点・備考	提出課題を計画的に進めること。

科目名	失語症Ⅰ	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験10年以上(病院勤務)のほか介護老人保健施設・特別養護老人ホームや訪問リハ業務などで多数の失語症患者の治療に携わった検件をもとに失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・失語症の発症のメカニズムについて学ぶ。 ・失語症の古典分類について学ぶ。 ・失語症の症状と周辺症状について学ぶ。 ・失語症の評価と訓練の基礎について学ぶ。
到　達　目　標	・失語症の発症のメカニズムについて説明できる。 ・失語症の古典分類とその障害像について説明できる。 ・失語症の症状と周辺症状について説明できる。 ・失語症の評価と訓練の基礎について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症の定義、生理解剖	失語症の定義から他の疾患の鑑別、また脳の生理解剖について学ぶ
2	失語症の原因疾患	失語症の原因となる疾患について理解する。
3	失語症の分類	ウェルニッケ・リヒトハイムを用いて古典的分類を学ぶ。
4	実際の症例におけるタイプ分類 失語症の症状	実際の症例をもとにタイプ分類を経験する。症例の発話や聴理解の症状の基礎を学ぶ。
5	失語症の症状	症例の発話や聴理解の症状の基礎を学ぶ。
6	失語症の症状	症例の発話や聴理解の症状の基礎を学ぶ。
7	小テスト	１～６コマの内容を小テスト形式で復習する。
8	復習と神経基盤	非流暢性など大きな分類に分けて神経基盤を学ぶ。
9	ブローカ失語について	ブローカ失語の病巣・特徴・症状について学ぶ。
10	ウェルニッケ失語について	ウェルニッケ失語の病巣・特徴・症状について学ぶ。
11	伝導失語について	伝導失語の病巣・特徴・症状について学ぶ。
12	超皮質性感覚失語について	超皮質性感覚失語の病巣・特徴・症状について学ぶ。
13	超皮質性運動失語について	超皮質性運動失語の病巣・特徴・症状について学ぶ。
14	重度失語症とその他の失語について	重度失語やその他の失語症の病巣・特徴・症状について学ぶ。
15	まとめ	前期末テストを実施し、１～１４コマ分のまとめを行う

準備学習（予習復習）の具体的な内容	これから失語症を学んでいく基礎となるため内容量が多い。予習よりも復習に時間を使ってほしい。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 40 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　失語症学　第3版　医学書院
参　考　書	特になし
授業の留意点・備考	ディスカッションを多めに設定しているので、他者に説明を行いながら知識を習得してほしい。 7コマ目に中間テストを実施予定なので復習の機会に使ってほしい。

科目名	失語症Ⅱ	担当教員	濵田　雄仁

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	標準失語症検査（SLTA）の概要及び実施についての解説及び演習を行う。
到　達　目　標	・標準失語症検査の内容について理解できる。 ・標準失語症検査をマニュアルを見ずに適切な手順で実施し、評価点をつけることができる。 ・標準失語症検査の結果をプロフィールにプロットできる。 ・標準失語症検査の結果を見て分析ができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症と失語症標準検査（SLTA）の概要	検査の概要の説明
2	ＳＬＴＡの【聴く】について①	標準失語症検査【聴く】についての実施手順と留意点の説明。
3	ＳＬＴＡの【聴く】について②	標準失語症検査【聴く】実技演習
4	ＳＬＴＡの【聴く】について③	標準失語症検査【聴く】実技演習
5	ＳＬＴＡの【話す】について①	標準失語症検査【話す】についての実施手順と留意点の説明。
6	ＳＬＴＡの【話す】について②	標準失語症検査【話す】実技演習
7	ＳＬＴＡの【話す】について③	標準失語症検査【話す】実技演習
8	ＳＬＴＡの【読む】について①	標準失語症検査【読む】についての実施手順と留意点の説明。
9	ＳＬＴＡの【読む】について②	標準失語症検査【読む】実技演習
10	ＳＬＴＡの【読む】について③	標準失語症検査【読む】実技演習
11	ＳＬＴＡの【書く】について①	標準失語症検査【書く】についての実施手順と留意点の説明。
12	ＳＬＴＡの【書く】について②	標準失語症検査【書く】実技演習
13	ＳＬＴＡの【書く】について③	標準失語症検査【書く】実技演習
14	ＳＬＴＡのまとめ	総合的な実技演習
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	失語症の古典的タイプ分類と症状について復習しておいてください。 １つのモダリティが終わる毎に検査練習をしっかりしてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 20 %）☐ その他（　　）
教　科　書	標準失語症マニュアル 標準言語聴覚障害学シリーズ　失語症学　医学書院
参　考　書	・『失語症学』（第２版）医学書院　・『高次脳機能障害学』（第２版）医歯薬出版 ・『失語症言語治療の基礎』紺野加奈江著　・『言語治療ハンドブック』医歯薬出版　等
授業の留意点・備考	標準失語症検査の実施についての授業です。評価実習で実際に患者様に対して実施する場合がありますので、手順と評価点を完璧に覚えるまで検査練習を実施してください。

科目名	失語症Ⅲ	担当教員	濵田　雄仁

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験10年以上（成人期の病院・訪問リハビリテーション）の臨床経験と、大学院で研鑽を積んだ失語症学をもとに、失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・失語症Ⅰ・Ⅱで学習した内容をもとに高次脳機能と絡めた形で失語症を学ぶ。 ・失語症の評価・訓練について学ぶ。 ・失語症の評価・訓練立案について学ぶ。
到　達　目　標	・失語症について高次脳機能障害との関連の中で説明ができる。 ・失語症の評価・訓練の内容について説明できる。 ・失語症の評価・訓練立案について説明できる。 ・失語症の評価結果をまとめることができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 認知神経心理学的モデルについて	モデルの概要について
2	認知神経心理学的モデルについて１	聴覚的理解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈
3	認知神経心理学的モデルについて２	発話障害の認知神経心理学的モデルによる解釈
4	認知神経心理学的モデルについて３	読解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈
5	認知神経心理学的モデルについて４	書字障害の認知神経心理学的モデルによる解釈
6	認知神経心理学的モデルについて５	SLTAと認知神経心理学モデルの解釈
7	失語症の評価１	認知神経心理学的モデルで統合的評価ができる
8	失語症の評価２	認知神経心理学的モデルで統合的評価ができる（2）
9	失語症の評価３	掘り下げ検査について考える
10	失語症の評価４	認知神経心理学的モデルと複数の失語症検査を統合的に理解する
11	失語症の訓練１	認知神経心理学的モデルに基づいた聴覚的理解訓練を考える
12	失語症の訓練２	認知神経心理学的モデルに基づいた読解訓練を考える
13	失語症の訓練３	認知神経心理学的モデルに基づいた口頭表出訓練を考える
14	失語症の訓練４	認知神経心理学的モデルに基づいた書字訓練を考える
15	まとめ	これまでの講義をもとに、失語症学について統合的に評価・訓練立案ができる

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を熟読し、掘り下げ検査を考える。また、実習前段階として、失語症と高次脳機能との類似点や相違点を包括的に理解できるために、高次脳機能障害についても理解しておく必要がある
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 20 %）☐ その他（　　）
教　科　書	失語症言語治療の基礎（診断と治療社） 標準言語聴覚障害学　失語症学　第3版（医学書院）
参　考　書	脳卒中後のコミュニケーション障害　協同医書出版社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	失語症学については、認知神経心理学を中心に学びますが、統合的に学習し、レポートの書き方だけでなく実際のかかわり方についても講義していきます。実習に臨む前の段階ですので、意識的に取り組んでください。

科目名	高次脳機能障害　I	担当教員	前森　翔太

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で、高次脳機能障害症例のリハビリに携わり、在宅・社会復帰に向けたアプローチを行なってきた経験を基に、高次脳機能障害の基礎や臨床について講義・演習を行う。
授　業　概　要	高次脳機能障害の定義を理解する。またそれぞれの障害の機序や症状などについて学習する。
到　達　目　標	高次脳機能障害の定義・機序・症状について理解を深め、それぞれについて説明することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	高次脳機能障害の基礎１	高次脳機能障害学　総論１
2	高次脳機能障害の基礎２	高次脳機能障害学　総論２
3	高次脳機能障害の基礎３	視覚認知の障害
4	高次脳機能障害の基礎４	視空間障害１
5	高次脳機能障害の基礎５	視空間障害２
6	高次脳機能障害の基礎６	聴覚認知の障害
7	高次脳機能障害の基礎７	触覚認知の障害
8	高次脳機能障害の基礎８	身体意識・病態認知の障害
9	高次脳機能障害の基礎９	行為・動作の障害
10	高次脳機能障害の基礎１０	記憶障害
11	高次脳機能障害の基礎１１	前頭葉と高次脳機能障害１
12	高次脳機能障害の基礎１２	前頭葉と高次脳機能障害２
13	高次脳機能障害の基礎１３	脳梁離断症状
14	高次脳機能障害の基礎１４	高次脳機能障害Ｉまとめ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	高次脳機能障害を理解するためには、まず正常な脳機能をしっかりと理解しておく必要がある。正常な脳機能に関して予習した上で授業に臨むと理解しやすい。
成　績　評　価	定期試験　（ 100 %）　（　　%）　（　　%）　（　　%） （　　%）　（　　%）　（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　第３版　医学書院
参　考　書	高次脳機能障害学　第３版　医歯薬出版株式会社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	不明な点があれば積極的に質問をしてください。

科目名	高次脳機能障害 II	担当教員	前森　翔太

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	高次脳機能障害学					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で、高次脳機能障害症例のリハビリに携わり、在宅・社会復帰に向けたアプローチを行なってきた経験を基に、高次脳機能障害の基礎や臨床について講義・演習を行う。
授　業　概　要	高次脳機能障害の定義を理解する。またそれぞれの障害の機序や症状などについて学習する。また高次脳機能障害者に対して、実際の臨床現場でそのように対応し、評価・リハビリテーションを行なっているのかを実際の症例を提示しながら学習していく。
到　達　目　標	高次脳機能障害の定義・機序・症状について理解を深め、それぞれについて説明することができる。また各高次脳機能障害者に対する対応方法や、適する評価方法の選択、リハビリテーションについて説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	高次脳機能障害の基礎１５	認知症１
2	高次脳機能障害の基礎１６	認知症２
3	高次脳機能障害の基礎１７	脳外傷によるコミュニケーション障害
4	高次脳機能障害の基礎１８	認知コミュニケーション障害
5	高次脳機能障害の臨床１	視空間障害の臨床
6	高次脳機能障害の臨床２	失行症の臨床
7	高次脳機能障害の臨床３	記憶障害の臨床
8	高次脳機能障害の臨床４	前頭葉機能障害の臨床
9	高次脳機能障害の臨床５	失認の臨床
10	高次脳機能障害の臨床６	高次脳機能障害と自動車運転
11	高次脳機能障害の臨床７	高次脳機能障害と患者、言語聴覚士の役割について考える
12	高次脳機能障害の症例検討１	高次脳機能障害の症状から分析する１
13	高次脳機能障害の症例検討２	高次脳機能障害の症状から分析する２
14	高次脳機能障害の症例検討３	高次脳機能障害II　まとめ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	高次脳機能障害を理解するためには、まず正常な脳機能をしっかりと理解しておく必要がある。正常な脳機能に関して予習した上で授業に臨むと理解しやすい。
成　績　評　価	定期試験　（ 100 %）　（　　%）　（　　%）　（　　%） （　　%）　（　　%）　（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　第３版　医学書院
参　考　書	高次脳機能障害学　第３版　医歯薬出版株式会社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	不明な点があれば積極的に質問をしてください。

科目名	失語・高次脳機能障害評価・訓練法	担当教員	濵田　雄仁/前森　翔太

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床経験の際に、高次脳機能障害の症例に対して評価・訓練を実施し、在宅復帰へ向けてリハビリを行った経験を基に実際の症例を呈示し、検査方法及び言語訓練の立案について講義・演習を行う。
授　業　概　要	・失語症のメカニズムを認知神経心理学的視点から解釈する。 ・高次脳機能についての理解を深める。
到　達　目　標	・高次脳機能検査の検査にどんな物があるか把握することができる。 ・検査の目的を理解し、適切に検査を選択・実施することができる。 ・検査結果から訓練について考えを深めることができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 高次脳機能障害について	評価の概要とその手法について。
2	認知神経心理学的モデルについて①	聴覚的理解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
3	認知神経心理学的モデルについて②	発話障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
4	認知神経心理学的モデルについて③	読解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
5	認知神経心理学的モデルについて④	書字障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
6	認知神経心理学的モデルについて⑤	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方①
7	認知神経心理学的モデルについて⑥	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方②
8	高次脳機能障害評価①（認知機能）	認知機能の評価方法を学び、演習を行う。
9	高次脳機能障害評価②（注意機能）	注意機能の評価方法を学び、演習を行う。
10	高次脳機能障害評価③（記憶）	記憶の評価方法を学び、演習を行う。
11	高次脳機能障害評価④（遂行機能）	遂行機能の評価方法を学び、演習を行う。
12	高次脳機能障害評価⑤（視空間認知）	視空間認知の評価方法を学び、演習を行う。
13	高次脳機能障害評価⑥（失行・失認）	失行・失認の評価方法を学び、演習を行う。
14	高次脳機能障害評価⑦（まとめ）	８～１４で学んだ高次脳機能評価について復習しまとめを行う。
15	実技試験	失語症評価、高次脳機能評価を正しく実施できる

準備学習（予習復習）の具体的な内容	6～7はパソコンを使用し考察を実際に組み立てていきます。
成　績　評　価	実技試験（ 100 %）　（　　%）　（　　%）　（　　%） （　　%）　（　　%）　（　　）
教　科　書	なるほど!失語症の評価と治療 ※高次脳機能評価に関しては教科書は使用しませんが、各神経心理学検査のマニュアルを使用します。
参　考　書	・『失語症学』（第２版）医学書院　・『高次脳機能障害学』（第3版）医歯薬出版 ・『失語症言語治療の基礎』紺野加奈江著　・『言語治療ハンドブック』医歯薬出版
授業の留意点・備考	失語・高次脳機能障害に対する評価演習の授業です。実習を見据えて準備及び練習に取り組んでください。

科目名	言語発達障害Ⅰ	担当教員	森田　朋子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所及び療育センター等の臨床現場で、個別の言語指導や集団療育の経験、地域支援に出る中で療育者や保護者への支援などの経験をもとに、子どもの言語発達を支えるための評価や指導について、実践的な講義や演習を行う。
授　業　概　要	小児の言語発達障害を理解するために必要な基礎知識を身に着けるための専門科目である。２年前期に学んだ言語発達学を基礎とし、言語発達障害の概要・種類・原因・評価について学習する。子どもの状態に合わせた支援方法を学ぶ。
到　達　目　標	・子どもの言語発達やコミュニケーションの発達について定型発達を理解した上で、言語発達障害の各障害像について理解を深める。・各障害の評価や支援についての概要を学ぶ。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	言語発達障害とは①	「言語発達障害とは」「言語発達障害の臨床」
2	言語発達障害とは②	幼児期・学童期の言語発達障害について
3	発達障害の各障害像を知る	分類、発達障害について
4	言語発達障害の評価・診断①	情報収集・症例（グループワーク）
5	言語発達障害の評価・診断②	各種検査について（宿題）
6	言語発達障害の評価・診断③	評価のまとめ
7	指導と支援①	発達段階に応じた指導（定型発達等、前期の振り返り・前言語期・幼児前期）
8	指導と支援②	発達段階に応じた指導（幼児後期・学童期）期ごとの課題を考えるグループワーク
9	指導と支援③	発達段階に応じた指導（幼児後期・学童期）期ごとの課題を考えるグループワーク
10	環境調整・連携	保護者支援・関係諸機関との連携
11	言語発達障害の医学的背景	発達の病理学・疾病について
12	言語検査	S-S・PVT-R・LCスケール等
13	症例を通して	演習（ケースについてグループワーク）
14	後期のまとめ	
15	試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	１年～2年前期までに学習した小児に関わる専門基礎分野や専門分野の教科を踏まえ、子どもの発達や障害について理解を深めていけるよう、知識を整理しておく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第３版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	言語発達障害Ⅱ	担当教員	森田　朋子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所及び療育センター等の臨床現場で、個別の言語指導や集団療育の経験、地域支援に出る中で療育者や保護者への支援などの経験をもとに、子どもの言語発達を支えるための評価や指導について、実践的な講義や演習を行う。
授　業　概　要	本事業は、小児の言語発達障害を理解するための専門科目として位置付けている。障がい別に、障がいの特性を知り、的確な評価、目標の設定、具体的な指導プログラムの立案ができるための基礎的な知識を学習する。
到　達　目　標	・各障害の原因・診断基準を知る。・子どもの言語発達の評価を行い、目標設定ができるようになる。・家族支援について学習する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	知的能力障害①	定義・診断基準・評価・言語・コミュニケーション障害の特徴
2	知的能力障害②	評価～支援について
3	知的能力障害③	評価～支援について
4	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導プログラムを立案する）
5	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導内容を検討する）
6	自閉スペクトラム症①	定義・診断基準・評価・言語・コミュニケーション障害の特徴
7	自閉スペクトラム症②	評価～支援について
8	自閉スペクトラム症③	評価～支援について
9	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導プログラムを立案する）
10	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導内容を検討する）
11	注意欠如多動症①	定義・診断基準・評価・言語・コミュニケーション障害の特徴
12	注意欠如多動症②	支援について
13	注意欠如多動症③	症例を通して考える
14	前期のまとめ	
15	試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	２年生で学習した小児の定型発達及び言語発達障害について基本的な知識を確認しておく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第３版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	言語発達障害Ⅲ	担当教員	森田　朋子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学Ⅲ							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所及び療育センター等の臨床現場で、個別の言語指導や集団療育の経験、地域支援に関わる中で療育者や保護者への支援などの経験をもとに、子どもの言語発達を支えるための評価や指導について、実践的な講義や演習を行う。
授　業　概　要	本授業は、３年前期の言語発達障害Ⅱに引き続き、言語聴覚士が関わる言語発達障害について具体的な評価・プログラム作成・指導について学習する。
到　達　目　標	各障害の言語発達上の課題を理解し、プログラムを立案し、指導内容を組み立てる。・家族への支援について考える。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	限局性学習症について①	定義・診断基準・評価・支援
2	限局性学習症について②	発達性読み書き障害について（定義・症状）
3	限局性学習症について③	発達性読み書き障害について（原因・評価・支援・指導）
4	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導プログラムの立案）
5	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導内容を検討する）
6	特異的言語発達障害について①	定義・言語コミュニケーション障害の特徴
7	特異的言語発達障害について②	評価～支援について
8	指導プログラムを考える（症例）	演習（指導プログラム・指導内容の立案）
9	言語検査について①	実施・採点等について
10	言語検査について②	実施・採点等について
11	1年間のまとめ（症例を通して）	演習（指導プログラム・指導内容の立案）
12	2年間のまとめ（症例を通して）	演習（指導プログラム・指導内容の立案）
13	3年間のまとめ（症例を通して）	演習（指導プログラム・指導内容の立案）
14	後期のまとめ	
15	試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	２年生で学習した小児の言語発達障害について基本的な知識を確認しておく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第３版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	重度心身障害	担当教員	本村　富士子/渡辺　ひとみ

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	【本村/保育士７年　言語聴覚士２２年】【渡辺/言語聴覚士１２年】　重症心身障害児・者施設特別支援学校ほか食事・言語コミュニケーション支援/重症心身障害児・者施設に勤務。入所者の食事、言語コミュニケーションの経験を活かし講義を行うことができる。
授　業　概　要	重症心身障害児・者の特性や「生命・生活・人生の質」について実技を交えて講義　特別支援学校を見学し実態を知る
到　達　目　標	重症心身障害児・者の理解と支援、特に言語聴覚士の役割や支援方法について知る　学生自身が感じる力考える力を培う

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	DVD鑑賞「今できること」
2	重症心身障害とは	歴史、概念の変遷、法律/条約/人権について
3	重症心身障害児・者の基本的理解	定義、原因、大島・横地分類、超重症児スコア　他
4		脳性麻痺とその他の合併症
5	重症心身障害児・者の評価	小児の発達段階の理解
6		評価法について
7	重心障害児者の言語・コミュニケーションの実践	支援について
8		拡大代替コミュニケーションについて
9	プレスピーチの評価と治療①	子どもの発達から見た「食事」
10	プレスピーチの評価と治療②	子どもの「摂食・嚥下障害」
11	プレスピーチの評価と治療③	重症心身障害児・者の摂食嚥下の特徴
12	プレスピーチの評価と治療④	重症心身障害児・者の食事支援
13	重症心身障害児・者の教育	特別支援学校の実態と言語聴覚士の役割
14	重症心身障害児・者の福祉と多職種連携	・重症心身障害と制度　・基本的な支援体制について
15	まとめ	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	随時プリント配布（テスト時に持ち込み可）
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 70 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	障害の重い子どもの評価と支援 - コミュニケーション支援の実践から－
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	

科目名	言語発達障害評価・訓練法Ⅰ	担当教員	小路　美香

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関や児童発達支援事業所で発達障害児はじめ児童のアセスメントや支援を行った経験を活かし、検査の概要や方法についての講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	「言語発達障害学」を基に、小児を対象とした言語療法について演習を通して学ぶ。小児のリハビリテーション、療育の現場で使用される頻度の高い知能検査、発達検査の実施について講義と演習で学習する。
到　達　目　標	小児領域で必要な検査を知り、実施する上で身につけておくべき態度や、事例や実演を通してそこから支援への分析ができるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	授業について説明。検査の歴史、種類、倫理について知る。
2	検査実施前の準備	ラポール形成、ロールプレイ
3	検査のガイドラインについて	検査のつくりを理解し、一般的なガイドラインを知る。
4	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
5	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
6	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
7	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
8	ウェクスラー式知能検査	結果処理の基本的な流れを学ぶ
9	ウェクスラー式知能検査	解釈のすすめ方を学ぶ
10	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
11	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
12	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
13	新版K式発達検査	結果処理の基本的な流れを学ぶ
14	新版K式発達検査	解釈のすすめ方を学ぶ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	小児の言語療法に関連する教科書を読んでおく。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 80 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断ー小児編
参　考　書	特になし
授業の留意点・備考	演習を中心に授業を行うので、グループワークに積極的に参加する。

科目名	言語発達障害評価・訓練法Ⅱ	担当教員	小路　美香

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関や福祉行政で発達障害児はじめ児童のアセスメントや支援を行った経験を活かし、検査の概要や方法についての講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	言語発達障害学を基盤として、小児のリハビリテーションの現場で使用される頻度の高い知能検査、発達検査の実施について講義と演習で学習する。
到　達　目　標	知能検査や発達検査を実施する上で身につけておくべき態度や、検査を受ける子どもの心について知り、検査の準備と実施、報告の一連の流れを身につけることができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	質問応答関係検査	実技と採点方法
2	質問応答関係検査	実技と採点方法
3	絵画語い発達検査（PVT-R）	実技と採点方法
4	絵画語い発達検査（PVT-R）	実技と採点方法
5	国リハ式（S-S）法言語発達遅滞検査	実技と採点方法
6	国リハ式（S-S）法言語発達遅滞検査	実技と採点方法
7	国リハ式（S-S）法言語発達遅滞検査	実技と採点方法
8	国リハ式（S-S）法言語発達遅滞検査	実技と採点方法
9	コミュニケーション発達スケール改訂版（LC-R）	実技と採点方法
10	コミュニケーション発達スケール改訂版（LC-R）	実技と採点方法
11	コミュニケーション発達スケール改訂版（LC-R）	実技と採点方法
12	コミュニケーション発達スケール改訂版（LC-R）	実技と採点方法
13	その他の発達検査、言語検査	
14	コミュニケーション発達スケール改訂版（LC-R）	実技と採点方法
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	小児の言語療法に関連する教科書を読んでおく。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 80 %）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断ー小児編
参　考　書	特になし
授業の留意点・備考	演習を中心に授業を行うので、グループワークに積極的に参加する

科目名	音声障害	担当教員	田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	音声障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	耳鼻咽喉科領域における臨床経験及び手術前後の発声管理の経験を基に音声障害に関わる言語聴覚士として講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・音声障害の評価・検査について系統的に学習する。 ・音声障害の治療方法について学習し実践する。
到　達　目　標	・音声障害の評価・検査について理解して実践する。 ・音声障害の治療を実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	音声障害の概要・解剖・生理	1年の言語聴覚障害概論Ⅱで学習した音声障害の概要について復習する。喉頭の解剖・生理について学習する。
2	喉頭の解剖・生理	喉頭の解剖・生理について学習する。喉頭の構造について触診演習を行う。内視鏡評価時の基本的な見方について学習する。
3	器質性音声障害	声帯ポリープ・声帯結節・ポリープ様声帯器質的音声障害についてその病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。GRBAS評価を実施する。
4	運動障害性音声障害	反回神経麻痺などの運動障害性音声障害についてその病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。GRBAS評価を実施する。
5	機能性音声障害	過緊張性発声などの機能性音声障害について病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。GRBAS評価を実施する。
6	気管切開・代用音声(無喉頭音声)	気管切開後のカニューレ管理及び喉頭摘出術後の無喉頭音声についてその種類・特性を学習する。
7	気管切開・代用音声(無喉頭音声)	カニューレ管理と無喉頭音声の発声特徴について学習する。
8	音声評価	内視鏡評価及びGRBAS評価、VHIなど音声障害の主観的評価について学習する。発声機能検査及び音響分析などの客観的評価法について学習する。
9	音声評価	内視鏡評価及びGRBAS評価、VHIなど音声障害の主観的評価について学習する。発声機能検査及び音響分析などの客観的評価法について学習する。
10	音声治療Ⅰ	音声治療の基本的な進め方について学習する。
11	音声治療Ⅱ	音声治療の間接訓練・直接訓練について学習する。具体的な手技について、グループで演習を交えて学習する。
12	音声治療Ⅲ	音声治療の間接訓練・直接訓練について学習する。具体的な手技について、グループで演習を交えて学習する。
13	音声機能改善術	音声機能改善術について、言語聴覚士の国家試験に備えて特徴及び術式について学習する。
14	音声機能改善術	音声機能改善術について、言語聴覚士の国家試験に備えて特徴及び術式について学習する。
15	試験	定期試験　70%　として評価する。成績評価については、下記を参照。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料に沿って講義を実施する。資料内容に合わせて参考書②の問題を解いておくこと。また、音声治療の内容については参考書①を用いて講義を実施するため、必ず持参を。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 70 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☑ 課題　（ 10 %）☑ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	STのための音声障害診療マニュアル　インテルナ出版
参　考　書	①言語聴覚士ドリル+音声障害　②言語聴覚士テキスト第３版ｐ366～
授業の留意点・備考	音声障害は、STとして嚥下・発声分野に関わる解剖学的にも重要な喉頭を中心とした内容になります。臨床現場にも応用の利く知識・手技も多いです。上記講義テーマに沿った内容を予習・復習しておくと理解しやすいです。【担当教員からのコメント】「専門用語が多く難しく感じますが、実際は耳で聞く以外にどうやったら声を可視化することができるの？なぜ嗄声が出てくるの？についてあらゆる角度から学ぶ分野です。特に予習をしておいて下さい。わからない時は立ち止まって一緒に考えて学んでいきましょう。」

科目名	運動障害性構音障害Ⅰ	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の行う運動障害性構音障害に対する講義・演習を行うことができる。
授業概要	運動障害性構音障害の7種類のタイプについて、それぞれの特徴や代表的な疾患について学習する。
到達目標	各タイプ分類ごとの発話特徴や代表的な疾患について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	運動系総論・錐体路について	皮質延髄路を含む錐体路の定義や各末梢神経との繋がりを学ぶ。
2	UUMNディサースリアについて①	UUMNディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
3	UUMNディサースリアについて②	UUMNディサースリアの発話特徴について学ぶ
4	痙性ディサースリアについて①	痙性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
5	痙性ディサースリアについて②	痙性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
6	失調性ディサースリアについて①	失調性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
7	失調性ディサースリアについて②	失調性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
8	運動低下性ディサースリアについて①	運動低下性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
9	運動低下性ディサースリアについて②	運動低下性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
10	運動過多性ディサースリアについて①	運動過多性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
11	運動過多性ディサースリアについて②	運動過多性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
12	弛緩性ディサースリアについて①	弛緩性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
13	弛緩性ディサースリアについて②	弛緩性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
14	混合性ディサースリアについて	混合性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 60 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	ディサースリアの基礎と臨床　第１巻　理論編　西尾正輝　著　：医歯薬出版
参考書	特になし
授業の留意点・備考	特になし

科目名	運動障害性構音障害Ⅱ	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の役割や制度について講義・演習を行うことができる。
授業概要	運動障害性構音障害の評価に全国的に使用されている標準ディサースリア検査（AMSD）の手技を
到達目標	標準ディサースリア検査（AMSD）の手順を理解しマニュアルを見ずに実施できるようになる。 標準ディサースリア検査（AMSD)の各検査項目の目的を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	標準ディサースリア検査（AMSD）の概要	標準ディサースリア検査の概要について学習する
2	発声発語器官の検査について①	呼吸機能の測定方法について学習する
3	発声発語器官の検査について②	発声機能の測定方法について学習する
4	発声発語器官の検査について③	鼻咽腔閉鎖機能の測定方法について学習する
5	発声発語器官の検査について④	舌の運動範囲の測定方法について学習する
6	発声発語器官の検査について⑤	口唇の運動範囲の測定方法について学習する
7	発声発語器官の検査について⑥	下顎の運動範囲の測定方法について学習する
8	発声発語器官の検査について⑦	反復運動速度の測定方法について学習する
9	発声発語器官の検査について⑧	筋力の測定方法について学習する
10	発声発語器官の検査について⑨	補助検査の測定方法について学習する
11	発話の検査について	発話特徴や発話速度の測定方法について学習する
12	まとめ①	発話検査から補助検査まで一連の流れで測定する
13	まとめ②	発話検査から補助検査まで一連の流れで測定する
14	SLTA補助検査について①	SLTA補助検査の概要について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☑ 実技試験（ 90 %）☐ 小テスト（　　%）☑ レポート（ 10 %） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他（　　）
教科書	AMSD検査道具 標準ディサースリア臨床　新装版　西尾正輝　著　：インテルナ出版 ディサースリア臨床標準テキスト　西尾正輝　著　：インテルナ出版
参考書	評価基準スピーチ・サンプル集　西尾正輝　著　：インテルナ出版 ディサースリアの基礎と臨床　西尾正輝　著　：インテルナ出版
授業の留意点・備考	授業終了時に問題を配布します。 授業内でグループで問題を解き、しっかり復習してください。

科目名	運動障害性構音障害Ⅲ	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の役割や制度について講義・演習を行うことができる。
授業概要	標準ディサースリア検査の結果から抽出された問題点に応じた訓練を実技を交えて学習する。 症例報告に必要となるレポートの作成方法を、模擬症例を通して実際に作成していく。
到達目標	問題点に応じた訓練の立案と実施が可能となる。運動障害性構音障害患者の症例レポートを作成できるようになる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	AMSDにおけるICFでの問題抽出	AMSDの評価内容をICFに基づいて各問題点を分類できる。
2	AMSDにおけるICFでの問題抽出、目標設定	AMSDの評価内容をICFに基づいて各問題点を分類できる。 症例を通して考える。また、目標設定が行える。
3	運動障害性構音障害の機能訓練①	呼吸機能訓練について学習する
4	運動障害性構音障害の機能訓練②	発声機能訓練について学習する
5	運動障害性構音障害の機能訓練③	鼻咽腔閉鎖機能訓練について学習する
6	運動障害性構音障害の機能訓練④	舌・口唇・下顎の機能訓練について学習する
7	運動障害性構音障害の機能訓練⑤	発話速度調節法について学習する
8	症例レポートの作成方法①	個人情報保護の観点を踏まえ一般的情報の記載方法を学習する
9	症例レポートの作成方法②	評価結果の記載方法について学習する
10	症例レポートの作成方法③	測定結果の分析手段と記載方法について学習する
11	症例レポートの作成方法④	問題点の記載方法について学習する
12	症例レポートの作成方法⑤	目標設定の方法について学習する
13	症例レポートの作成方法⑥	訓練立案の方法について学習する
14	症例レポートの作成方法⑦	考察の作成方法について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習(予習復習)の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 80 %）☐ 実技試験（ %）☐ 小テスト（ %）☐ レポート（ %） ☑ 課題（ 20 %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	ディサースリア臨床標準テキスト　西尾正輝　著　：医歯薬出版 言語聴覚士ドリル＋運動障害性構音障害　大塚裕一　著　：診断と治療者
参考書	特になし
授業の留意点・備考	officeソフト（Microsoft以外でも可）が搭載されたパソコンを持参してください。

科目名	機能性構音障害	担当教員	小路　美香

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童発達支援事業所や医療機関において、評価・指導の業務経験を活かし、子どものことばの発達について具体的な講義を行うことが出来る。
授　業　概　要	定型発達の音韻発達、構音発達をベースに、「機能性構音障害」の実際を学ぶ。 機能性構音障害を持つことにより起こり得る、様々な問題を知り、ＮＥＥＤに基づいた支援方法を探る。 構音障害に対する具体的な訓練方法を学び、子ども一人一人の状況に応じた訓練プログラムを立案する。
到　達　目　標	１．機能性構音障害を持つ子どもの評価、訓練を行うために必要な基礎知識を得る。 ２．評価に必要な情報収集、検査の実際を学習する。 ３．子どもを囲む様々な環境の阻害因子をさぐり、調整できるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	機能性構音障害とは	機能性構音障害の概要
2	日本語の子音と半母音	音が作られる場所（音声記号との対応）
3	発話の発達について	音韻発達と構音発達
4	小児の全体発達について	小児の認知発達・社会性の発達について
5	誤り音の産生・聞き取り	聞き取り練習
6	鑑別診断	聞き取り練習
7	構音検査について	検査演習
8	構音検査について	検査演習
9	構音検査について	解釈
10	インテーク・問診	実際の評価の場面
11	訓練法①	訓練法
12	訓練法②	訓練法
13	症例検討	４班に分かれて訓練プログラムの作成
14	訓練プログラムの発表・まとめ	発表
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習をしっかりしておいてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・構音障害の臨床ー基礎知識と実践マニュアル改訂第２版
参　考　書	適宜紹介します
授業の留意点・備考	

科目名	器質性構音障害	担当教員	池島　克行 若松　望

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関における口唇裂口蓋裂診療チームの一員として10年間の臨床経験があり、多数の口蓋裂患者の評価・訓練に携わってきた。
授　業　概　要	器質性構音障害のうち、口蓋裂に伴う言語障害について学ぶ。当該疾患が示す特徴的な言語障害について講義・演習を行う。口蓋裂が先天性の疾患であること、治療には多職種によるチームワークが不可欠であること、治療には20年近い長期間を要する特殊な病態であることを知り、その中で言語聴覚士がどのような役割を担い、実際に活動するかを学ぶ。
到　達　目　標	口蓋裂に関する基礎知識を習得し、口蓋裂に伴う言語障害の発現機序、メカニズムなどを理解できるようにする。また、口蓋裂に特有の鼻咽腔閉鎖機能不全や構音障害などの言語障害について正しく評価ができるようにする。さらに、構音訓練を中心とした治療方法についても詳しく学ぶ。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	口蓋裂と口蓋裂言語（導入） 口蓋裂治療における言語臨床家の役割（第1章）	臨床画像、スピーチサンプルを通して口蓋裂という疾患に触れる チームアプローチによる口蓋裂治療の流れと言語臨床家の役割について知る
2	口蓋裂の言語臨床に必要な基礎知識（第2章）	矢状断面図、開口正面図を用いて発声発語器官の概略を学ぶ 口唇口蓋裂の発生、タイプ、鼻咽腔閉鎖機能、手術について学ぶ 耳鼻科・歯科領域の問題、心理社会的問題、社会資源について学ぶ
3	口蓋裂言語（第3章）	構音発達、口蓋裂言語における共鳴の異常（開鼻声など）、構音障害の分類や発現頻度を学ぶ 日本語の音の体系、音声表記を学ぶ（テキスト巻末付録１）
4	口蓋裂言語の評価（第4章）	口腔顔面形態の評価を学ぶ 鼻咽腔閉鎖機能について、口蓋裂言語検査に基づいた評価方法、機器による検査方法を学ぶ
5	口蓋裂言語の評価（演習①開鼻声の評価）	開鼻声の聴覚判定について学ぶ（口蓋裂言語検査(言語臨床用)DVD、音声サンプル等を使用）
6	口蓋裂言語の評価（演習②呼気鼻漏出に伴う子音の歪みの評価）	呼気鼻漏出に伴う子音の歪みの構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ（口蓋裂言語検査(言語臨床用)DVD、音声サンプル等を使用）
7	口蓋裂言語の評価（演習③声門破裂音の評価）	声門破裂音の構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ（口蓋裂言語検査(言語臨床用)DVD、音声サンプル等を使用）
8	口蓋裂言語の評価（演習④口蓋化構音の評価）	口蓋化構音の構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ（口蓋裂言語検査(言語臨床用)DVD、音声サンプル等を使用）
9	口蓋裂言語の評価（演習⑤側音化構音の評価）	側音化構音の構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ（口蓋裂言語検査(言語臨床用)DVD、音声サンプル等を使用）
10	口蓋裂言語の評価（演習⑥鼻咽腔構音の評価） 口蓋裂言語の評価（咽喉頭摩擦音・破擦音、咽喉頭破裂音）	鼻咽腔構音の構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ 咽喉頭摩擦音・破擦音、咽喉頭破裂音について、構音動態、聴覚的特徴を学ぶ （「口蓋裂言語検査(言語臨床用)」のDVD、音声サンプル等を使用）
11	口蓋裂言語と治療（第5章）①	「口蓋裂言語検査(言語臨床用)」のDVD及び音声サンプルを用いて、咽喉頭摩擦音・破擦音および咽喉頭破裂音の構音動態、聴覚的特徴、聴覚判定の仕方について学ぶ 口蓋裂言語に対する医学的治療、言語治療について学ぶ 構音訓練については、伝統的な方法と系統的構音訓練について学ぶ
12	口蓋裂言語と治療（第5章）②	構音障害別の訓練方法について、それぞれ高頻度の誤り音を取り上げ、それに対する訓練のポイントと留意点、教示の方法などを具体的に学ぶ
13	乳児期の言語臨床（第6章） 幼児期の言語臨床（第7章）	各期の言語聴覚士の関わりと言語治療の方法について学ぶ
14	学童期の言語臨床（第8章） 思春期の言語臨床（第9章）	各期の言語聴覚士の関わりと言語治療の方法について学ぶ
15	まとめ・試験	試験内容は、①構音の聴覚判定、②問題（主に選択式）。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書に加えて、作成した資料を用いて講義を行うので、配布資料や筆記したノートの復習を確実に。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（　80　%）　☐ 実技試験　（　%）☑ 小テスト　（　10　%）☑ レポート　（　10　%） ☐ 課題　（　%）　☐ 発表　（　%）　☐ その他　（　）
教　科　書	口蓋裂の言語臨床　第3版：医学書院
参　考　書	標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版 医学書院 構音障害の臨床ー基礎知識と実践マニュアルー　改訂第2版：金原出版 口蓋裂言語検査（言語臨床用）：インテルナ出版　＊学校備品として 構音訓練のためのドリルブック　改訂第2版：協同医書出版
授業の留意点・備考	臨床に根ざした具体的な授業をするために、音声をふんだんに聴き、判定などの演習を十分に取り入れます。 理解を深めるために小テスト、レポート作成も行います。

科目名	摂食・嚥下障害Ⅰ	担当教員	田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	急性期病院における摂食嚥下療法業務の勤務・研究経験を活かして、摂食・嚥下障害の評価と治療に関する体系的な知識・技術を習得する講義が実施できる。
授　業　概　要	・摂食嚥下障害に関する解剖・生理・発達・加齢・関与する諸因子について学習し、評価と治療につながる基礎的な知識を身につける。 ・摂食嚥下障害のチームアプローチについて学習し、実践のための基礎的な知識を身につける。 ・摂食嚥下障害の評価・検査・診断の基礎知識について説明できる。
到　達　目　標	・摂食嚥下障害に関する諸器官の解剖・生理について説明できる。 ・摂食嚥下障害に関与する諸因子である唾液・栄養・呼吸・姿勢・発声構音について説明できる。 ・摂食嚥下障害のチームアプローチについて各職の役割とSTとの連携について説明できる。 ・摂食嚥下障害の評価・検査・診断の基礎的知識について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	摂食・嚥下障害　総論	1年次の言語聴覚障害学概論で学習した摂食・嚥下障害の内容について復習し、概説について再認識する。
2	摂食・嚥下機能の解剖Ⅰ	口腔・鼻腔・咽頭・喉頭・食道の構造について学習する。講義のほか、口腔内視診・触診などにより構造を臨床的に理解するための演習を行う。
3	摂食・嚥下器官の解剖Ⅱ	表情筋・咀嚼筋・口蓋筋・舌骨上下筋群などについて学習する。講義のほか、筋の触診により構造を臨床的に理解するための演習を行う。
4	摂食・嚥下機能の生理Ⅰ	食物の認知・取り込み・咀嚼・味の伝達・嚥下の神経機構について学習する。咀嚼時・嚥下時の器官の動きを理解するため食物を用いた演習を行う。
5	摂食・嚥下機能の生理Ⅱ	摂食・嚥下に関連する筋や神経機構について自ら描画しながら学習する。ここまでの内容について口頭試問を行う。
6	摂食嚥下のモデル	摂食嚥下のモデルについて学習する。5期モデルだけでなくプロセスモデルについて実感的に理解するために食物を用いた演習を行う。
7	摂食嚥下機能と発達	摂食嚥下機能の発達について学習する。乳児嚥下から押しつぶし・すりつぶしと発達する子どもの動画を視聴して気づきをまとめる演習を行う。
8	摂食嚥下機能と加齢	摂食嚥下機能の加齢による衰えをフレイルとサルコペニアの観点から学習する。舌骨と喉頭の距離を変化させるなど加齢の影響を実感する演習を行う。
9	摂食嚥下に関与する諸因子Ⅰ　唾液・栄養	摂食嚥下に関与する諸因子のうち唾液・栄養について学習する。唾液不足が嚥下に与える悪影響を実感する演習や自らの栄養状態を評価する演習を行う。
10	摂食嚥下に関与する諸因子Ⅱ 呼吸・姿勢・発声・構音	摂食嚥下に関与する諸因子のうち呼吸・姿勢・発声・構音を学習する。姿勢によって大きく変わる嚥下機能を実感するため食物を用いた演習を行う。
11	摂食嚥下リハビリテーション序説Ⅰ チームアプローチの意義・医師の役割	チームアプローチの意義と他職種の中でもSTに指示を下す医師の役割について学習する。この授業で初めて患者を全体的に評価する演習を行う。
12	摂食嚥下リハビリテーション序説Ⅱ リハ職の役割	チームアプローチに関わるリハ職の役割について学習する。STにも必須である体位変換・移乗・姿勢調整など身体の動き方について理解する演習を行う。
13	嚥下造影検査(VF)と嚥下内視鏡検査(VE)	摂食嚥下のモデルに沿って、模擬患者の評価を行う。
14	嚥下造影検査(VF)と嚥下内視鏡検査(VE)	摂食嚥下のモデルに沿って、模擬患者の評価を行う。
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習・復習しておくこと。実習着を着ての演習授業となるので実習着を用意する。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☑ 実技試験　（ 20 %）☐ 小テスト　（ 0 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版
参　考　書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版
授業の留意点・備考	嚥下障害は、STとして解剖学的にも重要な延髄・喉頭を中心とした内容になります。臨床現場にも応用の利く知識・手技も多く自らの知識・技術が対象患者の生命に直結することを意識して臨んで下さい。 【担当教員からのコメント】「何故、飲み込めるのか？を解剖・生理学の視点で学んでいきます。まずは、普段から自然にできている“嚥下”の基礎的なところから学んでいきましょう。」

科目名	摂食・嚥下障害Ⅱ	担当教員	田添　琢己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期従事の経験を基に、摂食嚥下障害におけるスクリーニング検査から嚥下機能精査（VE・VF）の見方を学び、治療に関する知識と技術を習得する講義を実施する。
授　業　概　要	・摂食嚥下障害の評価・検査・診断手技を実践的に学ぶ。 ・摂食嚥下障害の治療の基本方針について学ぶ。 ・摂食嚥下障害の治療手技を実践的に学ぶ。
到　達　目　標	・摂食嚥下障害の評価・検査を正しく見ることができる。 ・摂食嚥下障害の治療を選択し、説明ができる。 ・摂食嚥下障害の治療手技を実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	摂食嚥下モデルとその評価	摂食嚥下のモデルに基づいて、嚥下動態を理解することができる。
2	嚥下スクリーニング検査・各質問紙等	嚥下評価におけるスクリーニング検査、舌圧測定、質問紙について理解する。
3	嚥下機能精査の実際	嚥下内視鏡検査を中心に嚥下機能精査について学ぶ。
4	嚥下機能精査の実際	嚥下造影検査やその他の嚥下機能精査について学ぶ。
5	加齢における嚥下機能の影響	嚥下機能の加齢変化について学ぶ。
6	成人における嚥下障害（脳血管疾患編　基礎）	脳血管障害に伴った嚥下障害を理解する為、脳血管疾患に対しての基礎を学ぶ。 仮性球麻痺、球麻痺の違いを理解できる。
7	中間テスト　前半の復習	1～6講義までの中間テストを実施する。
8	疾患別における嚥下障害の特徴	各疾患における嚥下障害の特徴を理解する。
9	疾患別における嚥下障害の特徴	各疾患における嚥下障害の特徴を理解する。
10	摂食嚥下障害への介入	訓練を学ぶ前に摂食嚥下訓練の介入概要について学ぶ。
11	誤嚥の分類から考える間接嚥下訓練	誤嚥の分類から適切な間接嚥下訓練を選択できる。
12	誤嚥の分類から考える直接嚥下訓練	誤嚥の分類から適切な直接嚥下訓練を選択できる。
13	誤嚥の分類から考える代償嚥下方法	誤嚥の分類から適切な代償嚥下を選択できる。
14	小児の嚥下障害	小児の摂食嚥下における概要を理解する。
15	まとめ	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習しておくこと。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 40 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版
参　考　書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版
授業の留意点・備考	6コマ終わった時点で前半の小テスト実施します。テストに出す部分は授業でお伝えするので、メモを忘れずに

科目名	摂食・嚥下障害Ⅲ	担当教員	田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	急性期病院での摂食嚥下療法業務・研究経験を活かし、摂食・嚥下障害の評価・治療に関する体系的かつ実践的な知識と技術を伝授することができる。
授　業　概　要	・摂食・嚥下障害の治療手技について学ぶ。 ・摂食・嚥下障害のリスク管理について学ぶ。 ・摂食・嚥下障害の疾患別治療について学ぶ。
到　達　目　標	・摂食嚥下障害の治療手技を実践できる。 ・摂食嚥下障害の治療のリスク管理ついて説明できる。 ・摂食嚥下障害の疾患別治療手技を実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	リスク管理Ⅰ　誤嚥性肺炎	接食嚥下リハの最大のリスクの1つである誤嚥性肺炎の予防について学習する。誤嚥性肺炎の呼吸リハを演習する。
2	リスク管理Ⅱ　窒息・気管切開	接食嚥下リハのリスクの1つである窒息の予防と対処法について学習する。窒息の対処法を演習する。気管切開した接食嚥下障害患者のリハを学習する。
3	原疾患別リハⅠ　脳血管障害	接食嚥下障害の代表的な原疾患であるCVAについてそれによる障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。CVA患者によく使う手技の演習を行う。
4	原疾患別リハⅡ　その他の神経疾患	パーキンソン病など接食嚥下障害を来たす神経疾患についてそれによる障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。神経疾患患者によく使う手技の演習を行う。
5	原疾患別リハⅢ　器質性嚥下障害	器質性嚥下障害特に頭頸部癌術後の接食嚥下障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。頭頸部癌患者によく使う手技の演習を行う。
6	小児の摂食嚥下訓練Ⅰ	小児の接食嚥下障害の治療の基本方針について学習する。小児の代表的な治療手技であるバンケード法の受動的訓練を演習する。
7	小児の摂食嚥下訓練Ⅱ	小児の代表的な治療手技であるバンゲード法の受動的訓練を演習する。
8	小児の摂食嚥下訓練Ⅲ	小児の代表的な治療手技であるバンゲード法の能動的訓練を演習する。
9	直接的嚥下訓練	接食嚥下障害の直接的訓練について学習する。直接的訓練を演習する。
10	頚部胸部聴診法Ⅰ	頚部胸部聴診法の基礎である肺区・正常音・異常音について学習する。ブロンコ体操、互いの胸郭を用いた演習を行う。
11	頚部胸部聴診法Ⅱ・打診	頚部胸部聴診法を頭頸部・胸部模型を用いて演習する。打診により横隔膜の位置を特定する講義と演習を行う。
12	症例検討Ⅰ　検査結果の解釈	患者情報・嚥下評価を基に検査結果の解釈の学習と演習を行う。
13	症例検討Ⅱ　問題点抽出	患者情報・嚥下評価を基に問題点抽出の学習と演習を行う。
14	症例検討Ⅲ　目標設定	患者情報・嚥下評価を基に目標設定を行う。
15	症例検討Ⅳ　訓練立案	患者情報・嚥下評価を基に訓練立案を行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習しておくこと。また、基本的に実習着を着ての演習授業となるので実習着を用意する。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（ 50 %）☐ 実技試験　（ 50 %）☐ 小テスト　（ 50 %）☑ レポート　（ 100 %） ☐ 課題　（　%）☐ 発表　（　%）☐ その他（　）
教　科　書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版
参　考　書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版　言語聴覚士ドリル＋嚥下障害
授業の留意点・備考	【担当教員からのコメント】摂食嚥下障害Ⅰ・Ⅱの進行状況に沿って、テーマを調整します。

科目名	吃音	担当教員	森田紘生

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士としての臨床経験があり、小児吃音の相談・評価を実施した経験をもとに実際の症例を呈示し、検査方法及び言語訓練の立案について講義・演習を行う。
授業概要	・流暢性障害の特徴を知る。 ・流暢性障害の評価方法を知る。 ・流暢性障害の指導方法を知る。
到達目標	・流暢性障害を評価できる。 ・流暢性障害の指導方法を述べることができる。 ・指導プログラムを立案できる。 ・評価結果を援助に応用できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	吃音についての予備知識の確認
2	吃音の定義	DSM-5の診断基準やICD11の分類を紹介する。
3	吃音の原因論	吃音の研究者の紹介やその研究者が提唱してきた原因論を紹介する。
4	吃音の疾病分類	吃音の分類とその特徴
5	臨床の流れと情報収集	吃音児・者に対応する場合の注意点などを踏まえて臨床の流れを紹介する。
6	診断と評価における留意点	評価・注目すべき項目について紹介する。
7	小児の全体発達と言語発達	小児の全体発達と言語発達についての評価を紹介・実演する。
8	言語発達の評価・検査	言語についての発達を把握する。
9	吃音の評価・検査①	吃音検査法の実施演習（小児）
10	吃音の評価・検査②	吃音検査法の実施演習（成人）
11	間接的訓練方法	環境調整、認知行動訓練、メンタルリハーサルについて紹介する。
12	直接的訓練方法	流暢性形成訓練。吃音軽減訓練、統合的訓練について紹介する。
13	吃音児・者の心理	吃音児・者をとりまく環境・心理的負担について紹介する。
14	当事者のセルフヘルプグループ	吃音児・者の社会とのかかわりやピアカウンセリングについて紹介する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習を行ってください。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☑ その他 （ 演習参加 ）
教科書	・標準言語聴覚障害学シリーズ　発声発語障害学　（医学書院）　第３版 ・言語聴覚士ドリルプラス「吃音・流暢性障害」
参考書	・吃音の診断と指導（学苑社）
授業の留意点・備考	授業を受けた内容について、板書したノート、配布資料、教科書、参考図書を用いて、必ず復習を行い、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ考えてみて、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

科目名	小児聴覚障害Ⅰ	担当教員	髙田　規子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童発達支援センター熊本県ひばり園において、聴覚領域での小児言語聴覚療法に従事した経験を活かし、小児難聴の基礎と臨床を指導することができる。
授　業　概　要	聴覚の発達と聴覚障害の原因を理解するとともに、小児期からの聴覚障害が及ぼす影響についてきこえとことばの関係をふまえて考察する。 小児聴覚障害Ⅱで聴覚障害児の評価、訓練を学ぶ上での基礎知識となる。
到　達　目　標	・小児聴覚障害の原因について理解する。 ・聴覚障害の早期発見、早期療育において必要な検査や補聴機器に関する知識、療育に関する基礎知識を身に付ける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	擬似難聴体験
2	耳の発生と聴覚の発達	きこえの仕組みと障害
3	聴覚障害とライフステージ	難聴体験レポートのまとめ
4	難聴の原因と発症時期①	ハイリスク要因、遺伝性難聴、症候性難聴
5	難聴の原因と発症時期②	非症候性難聴
6	乳幼児の聴力検査①	乳幼児の聴力検査の種類
7	乳幼児の聴力検査②	乳幼児の聴力検査の種類
8	聴覚障害児の早期発見・早期療育	早期発見、診断、療育の流れ
9	聴覚障害児の早期発見・早期療育	一次的障害と二次的障害
10	聴覚障害児のきこえと補聴器・人工内耳①	聴力レベル、聴力型、言語帯域
11	聴覚障害児のきこえと補聴器・人工内耳②	補聴器・人工内耳の特徴
12	成人聴覚障害へのリハビリテーション	成人聴覚障害へのアプローチ
13	小児聴覚障害へのリハビリテーション	小児聴覚障害へのアプローチ
14	人工中耳の概要と適応	人工中耳の概要
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・標準言語聴覚障害シリーズ　聴覚障害学 ・言語聴覚士のための聴覚障害学（医歯薬出版） ・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－基礎編（建帛社）
参　考　書	
授業の留意点・備考	小児聴覚の基礎の講義になります。３年生の応用に向け、しっかり理解しましょう。

科目名	小児聴覚障害Ⅱ	担当教員	篠原　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での小児言語聴覚療法に従事した経験を活かし、小児難聴の基礎と臨床を指導することができる。
授　業　概　要	小児聴覚障害の評価、訓練の流れを理解し、評価方法や訓練内容について実践的に学ぶ。
到　達　目　標	・聴覚障害児の評価について理解を深める。 ・聴覚障害児の訓練について、聴覚、言語、発声発語それぞれのアプローチの方法を理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	小児聴覚障害の特徴
2	小児の指導・訓練	小児のハビリテーション
3	乳幼児の聴力検査	難聴児の早期発見の必要性
4	語彙習得の課題	聴覚障害児の語彙習得獲得の課題
5	乳幼児の補聴器適合	乳幼児の補聴器適合と種類
6	小児の人工内耳	小児への人工内耳の適合
7	選別聴力検査	聴覚検診・聴覚スクリーニング
8	症例検討①	症例別ケース検討
9	症例検討②	症例別ケース検討
10	症例検討③	症例別ケース検討
11	リハビリテーションの流れ	小児難聴リハビリテーションの流れ
12	視覚聴覚二重障害	視覚聴覚二重障害の疾患
13	視覚聴覚二重障害	視覚聴覚二重障害の指導法
14	まとめ	評価・訓練法のまとめ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・子どもの聴覚障害訓練ガイダンス（医学書院） ・標準言語聴覚障害学　聴覚障害学　（医学書院）
参　考　書	・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－臨床編 ・言語聴覚士のための聴覚障害学　（医歯薬出版株式会社）
授業の留意点・備考	内容が難しくなっていきます。毎回の講義を確実に理解し、分からない点はしっかり考え、解決しなけれな質問して、着実に理解してください。

科目名	成人聴覚障害Ⅰ	担当教員	田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	急性期病院及び耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の言語聴覚士としての臨床経験を基に講義を行う
授業概要	聴覚障害者のコミュニケーション能力の向上を図り社会参加できるよう、指導、援助する技術を理解する。
到達目標	・成人聴覚障害者の多様なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ方法及び評価を理解する。 ・難聴の種類に合わせた適切な支援方法を検討して理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	聴覚に関係する2年次までの内容を確認。聴覚の解剖生理を復習する。
2	聴力検査について	聴力検査について学習する。また、成人領域でよく使う検査項目について学ぶ。
3	聴力検査について	聴力検査について学習する。また、成人領域でよく使う検査項目について学ぶ。
4	聴覚補償（補聴器）	補聴器の適応、適合に関する評価、構造について学ぶ。
5	事例解析	補聴器装用者の事例を通して学ぶ。
6	聴覚補償（人工内耳）	人工内耳の適応、適合に関する評価、構造について学ぶ。
7	事例解析	人工内耳装用者の事例を通して学ぶ。
8	聴覚補償の総括	補聴器・人工内耳のそれぞれの重要事項のまとめ
9	コミュニケーション方法	成人聴覚障害者のコミュニケーション方法の多様性について学ぶ。
10	コミュニケーション方法	成人聴覚障害者のコミュニケーション方法の多様性について学ぶ。
11	成人難聴の指導・支援	高齢者の指導支援を検討する。
12	成人難聴の支援・支援	中途失聴の指導支援を検討する。
13	視覚聴覚二重障害	症候性難聴の特徴を捉えつつコミュニケーション方法について検討する。
14	視覚聴覚二重障害	症候性難聴の特徴を捉えつつコミュニケーション方法について検討する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配付資料を確認の上、事前に読むこと
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（　%）☐ 小テスト（　%）☐ レポート（　%） ☐ 課題（　%）☐ 発表（　%）☑ その他（　）
教科書	・標準言語聴覚障害学ｼﾘｰｽﾞ　聴覚障害学 ・聴覚検査の実際　改訂５版
参考書	
授業の留意点・備考	耳の解剖・生理を理解した上で、聴力評価・検査・支援方法の検討に臨んでください。【担当教員からのコメント】「成人の聴覚障害者は、難聴の程度、発症の時期、発達の経過、環境によって様々な支援が必要となります。まずは、疾患の特徴・聴覚保障機器について理解して支援方法を検討していきましょう。」

科目名	成人聴覚障害Ⅱ	担当教員	田代　丈二

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	急性期病院及び耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の言語聴覚士としての臨床経験を基に講義を行う
授業概要	聴覚障害者のコミュニケーション能力の向上を図り社会参加できるよう、指導、援助する技術を理解する。
到達目標	・成人聴覚障害者の多様なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ方法及び評価を理解する。 ・社会保障制度を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	検査・補聴器・人工内耳について復習をする。
2	聴覚補償機器と日常生活用具について	身体障害者福祉法と障害者総合支援法について学ぶ。
3	聴覚補償機器と日常生活用具について	身体障害者福祉法と障害者総合支援法について学び県内の状況と比較する。
4	聴覚補償機器と補装具について	身体障害者福祉法と障害者総合支援法について学ぶ。
5	聴覚補償機器と補装具について	身体障害者福祉法と障害者総合支援法について学び県内の状況と比較する。
6	日常生活用具と補装具について	聴覚障害の等級による支援内容の違いについて理解する。
7	補聴援助システムについて	周辺機器の設備内容にも配慮できるよう補聴援助システムについて理解する。
8	総括	聴覚補償機器、補装具、補聴援助システムいずれかにおいて、調査して発表する（Power point形式）。
9	症候性難聴と非症候性難聴	国家試験の問題としても出てくる症候性難聴について把握してまとめる。
10	症候性難聴と非症候性難聴	国家試験の問題としても出てくる症候性難聴について把握してまとめる。
11	症例検討Ⅰ	模擬患者を基に適切な検査項目を検討することができる。
12	症例検討Ⅱ	模擬患者を基に適切な聴覚補償機器を選択することができる。
13	症例検討Ⅲ	模擬患者を基に適切な訓練・支援方法を検討することができる。
14	模擬症例Ⅳ	模擬患者を基に適切な検査項目を検討することができる。
15	まとめ	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業内で出てきた専門用語は、必ず復習すること。
成績評価	☑ 定期試験（ 80 %）☐ 実技試験（ %）☐ 小テスト（ %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☑ 発表（ 20 %）☑ その他（ ）
教科書	・標準言語聴覚障害学ｼﾘｰｽﾞ　聴覚障害学 ・聴覚検査の実際　改訂５版
参考書	
授業の留意点・備考	症例検討については、成人聴覚障害Ⅰの内容の復習を行って下さい。【担当教員からのコメント】「聴覚補償機器・日常生活用具・補装具は、それぞれ何の制度に基づいて選択されているかをよく考えて望んで下さい。」

科目名	補聴器・人工内耳	担当教員	篠原　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、補聴器・人工内耳の構造から機能、装用者への指導法まで幅広く講義を行うことができる。
授　業　概　要	聴覚障害児・者への聴覚補償として、補聴器の理論と活用について学ぶ。 また、最重度聴覚障害児・者に対する人工内耳の適応について学び、リハビリテーションの方法などについて理解する。
到　達　目　標	・補聴器の基本構造と機能を理解し、フィッティングの方法について学ぶ。 ・人工内耳の基本構造と機能を理解し、マッピングや訓練の方法について学ぶ。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	音に関する基礎知識
2	補聴器に必要な音の知識	補聴器の歴史と種類
3	補聴器の構造（実技）	補聴器の構造と機能
4	補聴器の構造と特性	アナログ補聴器とデジタル補聴器
5	補聴器のフィッティング①	各調整器、イヤモールド、フックによる音響変化
6	補聴器のフィッティング②	規定選択法、挿入利得、装用利得
7	補聴器装用指導	補聴器の使用方法と指導法
8	人工内耳の構造と機能①	人工内耳の仕組み
9	人工内耳の構造と機能②	コード化法、マッピング
10	人工内耳の適応、術前検査	人工内耳の適合基準
11	人工内耳手術の流れ	人工内耳手術の流れ
12	成人聴覚障害へのリハビリテーション	成人聴覚障害者への補聴機器
13	小児聴覚障害へのリハビリテーション	小児聴覚障害者への補聴機器
14	人工中耳の概要と適応	人工中耳のしくみ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・言語聴覚士のための聴覚障害学（医歯薬出版）
参　考　書	・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－臨床編 ・言語聴覚士のための聴覚障害学　（医歯薬出版株式会社）
授業の留意点・備考	補聴器業者、人工内耳メーカーの方の講義もあります。貴重なお話ですので、しっかりと学んでください。

科目名	聴覚障害評価・訓練法Ⅰ	担当教員	篠原　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学病院耳鼻咽喉科での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚障害評価法についてその種類や流れを講義できる。
授　業　概　要	聴覚検査の種類やそれぞれの特徴を理解し、聴覚障害の評価において適切な選択と実施ができることを目標とする。
到　達　目　標	・聴覚検査を行う際の留意点を理解する。 ・各聴覚検査の特徴と適用について理解する。 ・各聴覚検査の検査手順を理解し、実施できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	聴覚検査を行う際の留意点
2	純音聴力検査①	気導・骨導聴力検査の目的、手順
3	純音聴力検査②	マスキング
4	純音聴力検査③	気導・骨導聴力検査の実施と記録
5	純音聴力検査④	気導・骨導聴力検査の実施と記録
6	語音聴力検査①	聴取閾値検査、弁別検査
7	語音聴力検査②	検査の実施と記録
8	閾値上聴力検査①	検査方法と臨床応用
9	閾値上聴力検査②	各種検査の実施と記録（ﾊﾞﾗﾝｽﾃｽﾄ、SISIﾃｽﾄなど）
10	閾値上聴力検査③	各種検査の実施と記録（ﾊﾞﾗﾝｽﾃｽﾄ、SISIﾃｽﾄなど）
11	インピーダンス・オージオメトリー	検査方法と臨床応用
12	他覚的聴力検査	蝸電図、ＡＢＲ、ＭＬＲ、ＳＶＲ
13	耳音響放射	検査の実施と臨床応用
14	蝸電図、ＡＢＲ、ＭＬＲ、ＳＶＲ	検査方法と臨床応用
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	検査方法をしっかり覚えるために、繰り返し練習を行うこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 90 %）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・聴覚検査の実際　（南山堂） ・病気がみえる耳鼻咽喉科（医療情報科学研究所）
参　考　書	
授業の留意点・備考	複数の聴覚検査の手技を覚えます。何度も練習し、体に覚えこませてください。

科目名	聴覚障害評価・訓練法Ⅱ	担当教員	篠原　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学病院耳鼻咽喉科での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚障害評価法についてその種類や流れを講義できる。
授　業　概　要	聴覚検査の種類やそれぞれの特徴を理解し、聴覚障害の評価において適切な選択と実施ができることを目標とする。
到　達　目　標	・各聴覚検査の特徴と適用について理解する。 ・各聴覚検査の検査手順を理解し実施できる。 ・検査結果を分析し、評価、訓練立案をすることができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	耳音響放射	OAEの理解
2	後迷路障害、機能性難聴の検査	後迷路障害、機能性難聴の分析
3	聴性誘発反応検査①	蝸電図、頭頂部反応検査
4	聴性誘発反応検査②	蝸電図、頭頂部反応検査
5	耳鳴検査	耳鳴り検査、耳鳴り治療
6	補聴器のための検査	補聴器のための適合検査
7	人工内耳のための検査	人工内耳の術前・術後検査
8	乳幼児の聴力検査	各種乳幼児聴力検査
9	検査結果の分析	検査結果からの分析
10	検査結果の分析	検査結果からの分析
11	訓練法①	訓練立案
12	訓練法②	訓練立案
13	訓練法③	考察
14	まとめ	聴覚障害評価・訓練計画
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☑ その他（口頭試問　　）
教　科　書	・聴覚検査の実際　（南山堂） ・病気がみえる耳鼻咽喉科（医療情報科学研究所） ・言語聴覚士ドリルプラス「聴覚障害」
参　考　書	
授業の留意点・備考	症例レポートの作成を行います。計画的に進めること。

科目名	地域言語聴覚療法（保育）	担当教員	臨床実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	実習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	保育士や看護師など保育施設で働く実習指導担当者が指導を行う。
授業概要	保育実習 言語聴覚士のいる保育現場で子どもと関わり、その発達を知ることで、子どもの特性やコミュニケーションのあり方について理解する。
到達目標	保育実習 個々の対象児の全体像を知り、小児の発達について理解する。 ・集団に対する幼児教育の実践を通して、その関わり方について学ぶ。 ・幼児教育を通して、将来言語聴覚士としてどのように取り組むのかについて考える。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	発達の理解１	運動面の発達の理解１
2	発達の理解２	運動面の発達の理解２
3	発達の理解３	運動面の発達の理解３
4	発達の理解４	認知面の発達の理解１
5	発達の理解５	認知面の発達の理解２
6	発達の理解６	認知面の発達の理解３
7	発達の理解７	摂食・嚥下面での発達の理解１
8	発達の理解８	摂食・嚥下面での発達の理解２
9	発達の理解９	摂食・嚥下面での発達の理解３
10	発達の理解１０	言語面の発達の理解１
11	発達の理解１１	言語面の発達の理解２
12	発達の理解１２	言語面の発達の理解３
13	発達の理解１３	言語運用の発達の理解１
14	発達の理解１４	言語運用の発達の理解２
15	発達の理解１５	言語運用の発達の理解３

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成績評価	☐ 定期試験 （ %） ☑ 実技試験 （ 30 %） ☐ 小テスト （ %） ☑ レポート （ 30 %） ☐ 課題 （ %） ☑ 発表 （ 30 %） ☑ その他 （実習完了 １０％ ）
教科書	
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	地域言語聴覚療法（介護）	担当教員	臨床実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	40	授業形態	実習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	介護士や看護師、福祉施設で働く実習指導担当者が指導を行う。
授　業　概　要	介護実習 介護の現場を知り、高齢者と関わることでその特性を理解し、言語聴覚臨床の現場へ出る際の礎とする。
到　達　目　標	介護実習 対象者の全体像と問題点を知り、その対象　者と接触を持ち 、 基本的な介護方法を学ぶと共に、医療 ・福祉サービスについて理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	対人援助１	高齢者と直接接し、対人援助に必要な心構えや技術を学ぶ。
2	対人援助２	高齢者と直接接し、対人援助に必要な心構えや技術を学ぶ。
3	対人援助３	高齢者とのコミュニケーションについて１
4	対人援助４	高齢者とのコミュニケーションについて２
5	対人援助５	高齢者とのコミュニケーションについて３
6	対人援助６	高齢者の生活環境について１
7	対人援助７	高齢者の生活環境について２
8	対人援助８	高齢者の食事について１
9	対人援助９	高齢者の食事について２
10	対人援助１０	高齢者の食事について３
11	対人援助１１	高齢者の食事と飲み物について１
12	対人援助１２	高齢者の食事と飲み物について２
13	対人援助１３	高齢者に必要な援助とは１
14	対人援助１４	高齢者に必要な援助とは２
15	対人援助１５	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	日々の振り返りをしっかり行ってください。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 30 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 30 %）☑ その他 （実習完了　１０%　　）
教　科　書	
参　考　書	
授業の留意点・備考	・１日８時間×５日＝週４０時間を基本とする。

科目名	言語聴覚療法管理学Ⅰ	担当教員	言語聴覚療法学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	言語聴覚療法学科の各教員がそれぞれの経験を基に講義を行う。
授業概要	○２年次で行われる実習に先立ち、実習に際して求められる資質について講義・演習を通して学ぶ。 ○当該科目は、座学で実習にあたっての心構えや日誌の書き方、利用者の方等との接し方について学び、演習の中で各実習において必要となる事項について学ぶ。
到達目標	○実習においては、知識的側面のみならず実践的な側面が求められる。実習先におけるこれら要求に応えられるような人材を育成する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	臨床実習にあたっての心構え
2	病院や施設について	臨床実習において求められる資質について 実習指導者・職場スタッフとの関わり方について
3	日誌・レポート・レジュメについて	実習日誌・レポート・レジュメの書き方
4	プロフィール作成	プロフィールシートの作成について
5	プロフィール完成	プロフィールシートの完成・郵送
6	個人情報保護について①	医療人になるとは～その心構え～
7	個人情報保護について②	個人情報の定義とその範囲
8	実習前指導①	移乗動作・車椅子の扱い方・歩行の介助について
9	実習前指導②	移乗動作・車椅子の扱い方・歩行の介助について
10	実習前指導③	感染予防について
11	実習前指導④	バイタル測定について
12	実習での接遇について①	宿泊研修でのグループワーク
13	実習での接遇について②	宿泊研修でのグループワーク
14	実習での接遇について③	宿泊研修でのグループワーク
15	お礼状について	お礼状の書き方

準備学習（予習復習）の具体的な内容	今後の実習および臨床場面における基礎的な部分です。実習前指導については、授業内容に合わせて各学科の専任教員へ依頼しています。演習を通して、分からない時は積極的に尋ねるよう心がけて下さい。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☑ 課題（ 20 %）☑ 発表（ 30 %）☑ その他（演習参加態度　50%　）
教科書	適宜資料を配布します。※必ずメモを取れるように準備して下さい。
参考書	復習を行って下さい。
授業の留意点・備考	※実習着等が必要になる講義があるため、事前に確認してください。

科目名	言語聴覚療法管理学Ⅱ	担当教員	言語聴覚療法学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目					選択・必修			

担当教員の実務経験	言語聴覚療法学科の教員が各専門分野について臨床経験に基づいて実践的に教授することができる。
授業概要	3.4年次に実施される実習に際して求められる知識・技術・心構えなどについて講義・演習を通して学ぶ。
到達目標	・実習で求められる知識や技術を身につける。 ・臨床で求められる人間性について理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	臨床実習にあたっての心構え	臨床実習にあたっての心構え
2	臨床実習において求められる資質	臨床実習において求められる資質
3	実習記録について	個人情報保護・日報・ケースノート・レポート作成時の注意
4	症例へのアプローチ（成人）	インテーク・スクリーニング
5	症例へのアプローチ（成人）	メモ・カルテ・ICFについて
6	症例へのアプローチ（成人）	メモ・カルテ・ICFについて
7	症例へのアプローチ（成人）	メモ・カルテ・ICFについて
8	症例へのアプローチ（成人）	問題点抽出・目標設定・訓練立案①
9	症例へのアプローチ（成人）	問題点抽出・目標設定・訓練立案②
10	症例へのアプローチ（小児）	小児における問題点抽出・目標設定や訓練立案を行う
11	症例へのアプローチ（小児）	小児における問題点抽出・目標設定や訓練立案を行う
12	症例へのアプローチ（小児）	小児における問題点抽出・目標設定や訓練立案を行う
13	症例へのアプローチ（小児）	小児における問題点抽出・目標設定や訓練立案を行う
14	総括	
15	レポート作成	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指示があった場合は実習着を着用すること。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☑ 実技試験（ 50 %）☐ 小テスト（　　%）☑ レポート（ 50 %） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他（　　）
教科書	・明日から使える言語聴覚障害診断ー成人編改訂第２版 ・明日から使える言語聴覚障害診断ー小児編 ・言語聴覚士のための臨床実習テキストー成人編 ・言語聴覚士のための臨床実習テキストー小児編
参考書	特になし
授業の留意点・備考	臨床に直接関わる授業である。真剣に取り組むこと。

科目名	臨床実習Ⅰ（言語体験記録）	担当教員	実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	40	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士免許を所持し各実習施設で言語聴覚士として実務を行っている。
授業概要	病院及び施設等での１週間の実習を通して、言語療法対象者および言語聴覚士とのコミュニケーションの重要性とその方法、障害を持つ人への対応や社会人としての態度など基本的姿勢について実践的に学ぶ。
到達目標	言語聴覚療法のさまざまな活動を通してリハ・チームのなかでの言語聴覚士の役割と他部門との関係を理解する。自分の職業（言語聴覚士）に対する適正について考える。臨床体験を通して学校での学習をより具体的イメージをもって捉え、第３学年へ向けて学習意欲を高める。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	臨床実習指導者の指導に従って実習を行う	
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	学習した内容の中でも専門分野を統合的に復習しておく
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（ 60 %）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（ 30 %）☑ その他（完了10%　　）
教科書	特になし
参考書	症例に応じて、各分野の専門書を参照してください。
授業の留意点・備考	特になし

科目名	臨床実習Ⅱ(評価実習)	担当教員	各施設言語聴覚士

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	3	時数	120	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	

担当教員の実務経験	臨床実習指導資格を持つ病院・施設などの言語聴覚士により実践的かつ系統的な指導が可能である。
授業概要	・病院および施設等での3週間の実習を通して評価方法を実践的に学習する。 ・学校の定める実習施設における系統的学習を行う。
到達目標	・対象者に関する情報を収集できる。 ・収集した情報を分析・統合して対象者の全体像を把握できる。 ・情報を収集するために観察・面接・検査その他を実施できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
2	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
3	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
4	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
5	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
6	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
7	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
8	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
9	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
10	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
11	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
12	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
13	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
14	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
15	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など

準備学習（予習復習）の具体的な内容	各種検査について理論と方法を十分学習し、習熟しておくこと。
成績評価	☐ 定期試験 （ %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☑ 発表 （ 30 %）☑ その他 （ 実習評価点60%実習完了点10% ）
教科書	特に指定しない。
参考書	特に指定しない。
授業の留意点・備考	・実習指導者の指示に従い、謙虚な姿勢で学びながら対象者と接してもらいたい。 ・常に探究心をもって実習に望んでもらいたい。

科目名	臨床実習Ⅲ・Ⅳ（長期実習）	担当教員	実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	通年	単位数	12	時数	480	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床実習指導資格を持つ言語聴覚士
授業概要	実習を通して、評価から訓練立案、再評価までの一連の業務内容について学ぶ。 実習全般を通して言語聴覚士の業務内容を理解する。
到達目標	対象者に関する情報収集について学ぶ。 対象者の情報を分析し全体像を把握する。 問題点の抽出を行い訓練計画を立案する。 リハビリの業務について理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	実習指導者の指導による。	実習指導者の指導による。
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	〃	〃
6	〃	〃
7	〃	〃
8	〃	〃
9	〃	〃
10	〃	〃
11	〃	〃
12	〃	〃
13	〃	〃
14	〃	〃
15	〃	〃

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☑ 実技試験（ 60 %）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☑ 発表（ 30 %）☑ その他（完了　１０％　）
教科書	
参考書	
授業の留意点・備考	・これまで学んだ内容を応用し実習に取り組む。 ・実習を通し言語聴覚士の業務全般を把握する。

科目名	言語聴覚療法特論Ⅰ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
2	基礎医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
3	臨床医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
4	臨床医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
5	臨床歯科学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
6	臨床歯科学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
7	音声・言語・聴覚医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
8	音声・言語・聴覚医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
9	音声・言語・聴覚医学について③	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
10	心理学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
11	心理学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
12	音声・言語学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
13	音声・言語学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
14	社会福祉・教育について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
15	社会福祉・教育について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	言語聴覚障害学総論①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
17	言語聴覚障害学総論②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
18	失語・高次脳機能障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
19	失語・高次脳機能障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
20	言語発達障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
21	言語発達障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
22	発声発語・嚥下障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
23	発声発語・嚥下障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
24	聴覚障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
25	聴覚障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
26	模擬試験①	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
27	模擬試験解説①	模擬試験①について解説する。
28	模擬試験②	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
29	模擬試験解説②	模擬試験②について解説する。
30	まとめ	模擬試験①・模擬試験②の要点のまとめを行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験①・②各30%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語聴覚療法特論Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
2	基礎医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
3	臨床医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
4	臨床医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
5	臨床歯科学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
6	臨床歯科学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
7	音声・言語・聴覚医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
8	音声・言語・聴覚医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
9	音声・言語・聴覚医学について③	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
10	心理学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
11	心理学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
12	音声・言語学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
13	音声・言語学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
14	社会福祉・教育について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
15	社会福祉・教育について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	言語聴覚障害学総論①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
17	言語聴覚障害学総論②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
18	失語・高次脳機能障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
19	失語・高次脳機能障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
20	言語発達障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
21	言語発達障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
22	発声発語・嚥下障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
23	発声発語・嚥下障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
24	聴覚障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
25	聴覚障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
26	模擬試験①	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
27	模擬試験解説①	模擬試験①について解説する。
28	模擬試験②	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
29	模擬試験解説②	模擬試験②について解説する。
30	まとめ	模擬試験①・模擬試験②の要点のまとめを行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験①・②各30%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法演習Ⅰ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組むとともに、活用できる知識を身につける。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	医学総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
2	基礎医学について②	解剖学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
3	基礎医学について③	生理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
4	基礎医学について④	病理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
5	臨床医学について①	内科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
6	臨床医学について②	小児科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
7	臨床医学について③	精神医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
8	臨床医学について④	リハビリテーション医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
9	臨床医学について⑤	耳鼻咽喉科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
10	臨床医学について⑥	臨床神経学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
11	臨床医学について⑦	形成外科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
12	臨床歯科医学について①	臨床歯科医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
13	臨床歯科医学について②	口腔外科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
14	音声・言語・聴覚医学について①	呼吸発声発語系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
15	音声・言語・聴覚医学について②	聴覚系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	音声・言語・聴覚医学について③	神経系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
17	心理学①	学習・認知心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
18	心理学②	心理測定法について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
19	心理学③	臨床心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
20	心理学④	生涯発達心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
21	音声・言語学①	音声学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
22	音声・言語学②	音響学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
23	音声・言語学③	聴覚心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
24	音声・言語学④	言語学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
25	音声・言語学⑤	言語発達学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
26	社会福祉・教育①	社会保障制度について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
27	社会福祉・教育②	リハビリテーション概論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
28	社会福祉・教育③	医療福祉教育・関係法規について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
29	基礎分野まとめ	1～28回目までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
30	基礎分野模擬試験	1～28回目までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法演習Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組むとともに、活用できる知識を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害学総論について①	言語聴覚障害学総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
2	言語聴覚障害学総論について②	言語聴覚障害診断学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
3	失語症について①	失語症の定義について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
4	失語症について②	言語症状と失語症候群について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
5	失語症について③	失語症の評価・診断について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
6	失語症について④	失語症の訓練・援助について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
7	失語症について⑤	後天性小児失語症について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
8	高次脳機能障害について①	神経心理学の基本概念について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
9	高次脳機能障害について②	各種高次脳機能障害の病巣・症状・検査について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
10	高次脳機能障害について③	高次脳機能障害の指導・訓練について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
11	言語発達障害学について①	言語発達障害の総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
12	言語発達障害学について②	言語発達障害の評価について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
13	言語発達障害学について③	言語発達障害の指導、訓練について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
14	発声発語・嚥下障害学について①	音声障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
15	発声発語・嚥下障害学について②	構音障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	発声発語・嚥下障害学について③	嚥下障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
17	発声発語・嚥下障害学について④	吃音について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
18	聴覚障害学①	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
19	聴覚障害学②	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
20	聴覚障害学③	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
21	聴覚障害学④	成人聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
22	聴覚障害学⑤	成人聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
23	聴覚障害学⑥	補聴器・人工内耳について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
24	聴覚障害学⑦	補聴器・人工内耳について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
25	聴覚障害学⑧	視覚聴覚二重障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
26	まとめ①	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
27	まとめ②	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
28	まとめ③	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
29	まとめ④	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
30	模擬試験	1～25までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語聴覚療法総合	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	総合判定試験に合格できるよう取り組む。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
2	基礎医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
3	臨床医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
4	臨床医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
5	臨床歯科学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
6	臨床歯科学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
7	音声・言語・聴覚医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
8	音声・言語・聴覚医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
9	音声・言語・聴覚医学について③	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
10	心理学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
11	心理学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
12	音声・言語学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
13	音声・言語学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
14	社会福祉・教育について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
15	社会福祉・教育について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	言語聴覚障害学総論①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
17	言語聴覚障害学総論②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
18	失語・高次脳機能障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
19	失語・高次脳機能障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
20	言語発達障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
21	言語発達障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
22	発声発語・嚥下障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
23	発声発語・嚥下障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
24	聴覚障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
25	聴覚障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
26	模擬試験①	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
27	模擬試験②	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
28	模擬試験③	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
29	模擬試験④	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
30	模擬試験⑤	過去の国家試験問題を実施し、解説する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	症例研究	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	症例を通して、分析方法やレポートの書き方などを学ぶ。実習で実際経験した症例等をまとめ、発表することを目的とるする。発表に際しては、個人が特定できない形で暗号化を行うとともに、個人情報の扱いにも十分留意しながら、研究を進めていく。
到達目標	自ら問題点を探求し、解決できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	症例研究とは、症例研究テーマの立案①	ケースノートをまとめる。
2	症例研究とは、症例研究テーマの立案②	ケースノートをまとめる。
3	症例研究とは、症例研究テーマの立案③	ケースノートをまとめる。
4	症例研究とは、症例研究テーマの立案④	ケースノートをまとめる。
5	症例研究とは、症例研究テーマの立案⑤	ケースノートをまとめる。
6	症例研究とは、症例研究テーマの立案⑥	ケースノートに応じて主題や副題を設定する。
7	症例研究の倫理①	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
8	症例研究の倫理②	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
9	症例研究の倫理③	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
10	症例研究の倫理④	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
11	症例研究の倫理⑤	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
12	文献検索①	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
13	文献検索②	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
14	文献検索③	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
15	文献検索④	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	症例研究レポートの作成①	レジュメを作成する。
17	症例研究レポートの作成②	レジュメを作成する。
18	症例研究レポートの作成③	レジュメを作成する。
19	症例研究レポートの作成④	レジュメを作成する。
20	症例研究レポートの作成⑤	レジュメを作成する。
21	症例研究レポートの作成⑥	レジュメを作成する。
22	症例研究レポートの作成⑦	レジュメを作成する。
23	症例研究レポートの作成⑧	レジュメを作成する。
24	症例研究レポートの作成⑨	レジュメを作成する。
25	症例研究発表スライド作成①	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
26	症例研究発表スライド作成②	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
27	症例研究発表スライド作成③	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
28	症例研究発表スライド作成④	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
29	症例研究発表	
30	症例研究発表	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	特になし。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☑ 課題（ 20 %）☑ 発表（ 80 %）☐ その他（　　）
教科書	特になし。
参考書	症例に応じて、各分野の専門書を参照してください。
授業の留意点・備考	officeが搭載されたパソコンを準備してください。